

平成23年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成23年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で28遺跡29件、約11.5万m²が調査され、旧石器時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成24年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

目 次

平成23年度の調査結果について 1

I 発掘調査報告

(1) 笹平遺跡及び奥州道中（盛岡市）	5
(2) 矢盛遺跡第29次調査（盛岡市）	19

II 発掘調査概報

(3) 芋田沢田IV遺跡第3次調査（盛岡市）	39
(4) 鶴飼遺跡（盛岡市）	40
(5) 中嶋遺跡（花巻市）	41
(6) 大烟Ⅲ遺跡（遠野市）	42
(7) 新田Ⅱ遺跡（遠野市）	43
(8) 千刈遺跡（北上市）	44
(9) 大平野Ⅱ遺跡（奥州市）	45
(10) 二又遺跡（盛岡市）	46
(11) 不動館跡（二戸市）	47
(12) 彼岸田遺跡（奥州市）	48
(13) 田高Ⅱ遺跡（奥州市）	49
(14) 安久沢東遺跡（奥州市）	50
(15) 錢倉遺跡（奥州市）	51
(16) 石田I・II遺跡（奥州市）	52
(17) 要害遺跡（奥州市）	53
(18) 沢田遺跡（奥州市）	54
(19) 堤遺跡（奥州市）	55
(20) 作屋敷遺跡（奥州市）	56
(21) 中烟城跡（奥州市）	57
(22) 八反町遺跡（奥州市）	58
(23) 古城林遺跡（奥州市）	59
(24) 小野遺跡（一関市）	60
(25) 中神四日市遺跡（一関市）	61
(26) 小野Ⅱ遺跡（一関市）	62
(27) 飯岡才川遺跡第18・19次調査（盛岡市）	63
(28) 佐原Ⅱ遺跡（宮古市）	64

平成23年度の発掘調査成果について

平成23年度の発掘調査事業は30遺跡111,257m²で開始したが、年度途中での中止や追加を含めて最終的には28遺跡29件114,622m²の調査に着手した。本調査以外では、農業基盤整備事業等に関する試掘確認調査を実施している。

後期旧石器時代では奥州市中畠城跡（21）を調査した。剥片3点のみの出土であった。

縄文時代では盛岡市芋田沢田IV遺跡（3）・鶴飼遺跡（4）、奥州市大平野II遺跡（9）・田高II遺跡（13）、遠野市大畑III遺跡（6）・新田II遺跡（7）、北上市千刈遺跡（8）などを調査した。

芋田沢田IV遺跡では早期の大集落を調査した。鶴飼遺跡では後期の住居跡4棟と陥し穴群が検出されている。大平野II遺跡は中期・後期の竪穴住居跡7棟と土坑135基などが検出され、集落が小さな沢の近くに形成されていることが明らかになった。田高II遺跡は前期後葉の竪穴住居跡1棟と陥し穴・遺物包含層などが検出されている。大畑III遺跡は竪穴住居跡19棟・土坑25基などが検出され、中期後葉～末の集落跡が確認された。新田II遺跡は後期～晚期の大規模な遺物包含層が検出され、トチ・クルミなどの堅果類も出土している。千刈遺跡は北上川西岸沿いに形成された自然堤防上に立地し、中期と晚期の住居跡5棟と土坑31基、多数の柱穴状土坑が検出されている。

弥生時代では、宮古市佐原II遺跡（28）があり、竪穴住居跡2棟が重複して検出された。

古墳時代は、奥州市石田I・II遺跡（16）と沢田遺跡（18）がある。どちらも国史跡の前方後円墳「角塚古墳」の東側に位置しており、石田I・II遺跡は集落として、沢田遺跡は墓域として利用されていたようである。いずれも部分的な調査であるが、石田I・II遺跡は竪穴住居跡が數十棟検出され、黒曜石製石器やコハク玉が出土している。沢田遺跡は円形周溝や土坑墓が検出されている。

奈良時代は奥州市堤遺跡（19）と作屋敷遺跡（20）・石田I・II遺跡から検出されている。堤遺跡からは竪穴住居跡や土坑が、作屋敷遺跡は竪穴住居跡3棟・石田I・II遺跡からは竪穴住居跡と併設される竪穴状遺構が検出されている。石田I・II遺跡からは鍛冶関連遺物が出土している。

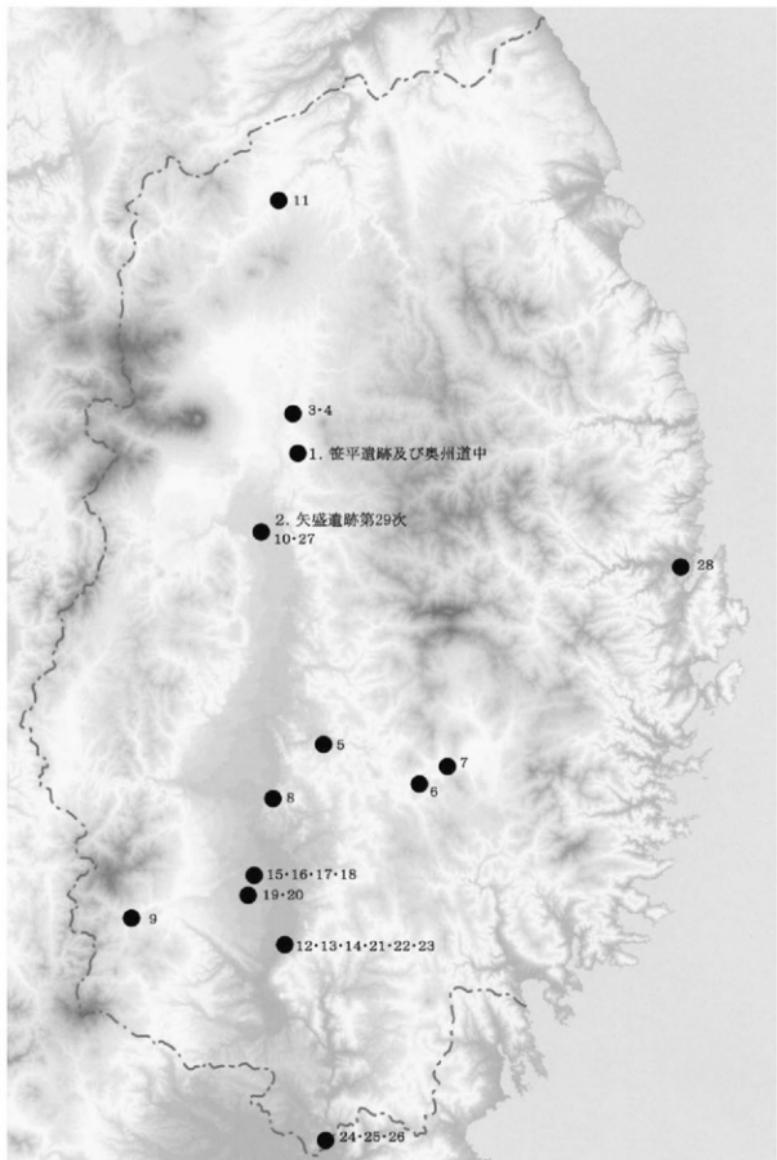
平安時代は縄文時代同様に多くの遺跡で検出されている。盛岡市二又遺跡（10）・飯岡才川遺跡（27）、一関市小野遺跡（24）、奥州市田高II遺跡・安久沢東遺跡（14）・彼岸田遺跡（12）・古城林遺跡（23）・八反町遺跡（24）・要害遺跡（17）・石田I・II遺跡・堤遺跡・作屋敷遺跡などがある。二又遺跡では竪穴住居跡12棟と掘立柱建物跡1棟等が検出され、中でも掘立柱建物跡は径1mほどの巨大な柱穴から構成されていた。古城林遺跡からは竪穴住居跡2棟と建物・円形周溝墓2基が検出されたほか、作屋敷遺跡からは竪穴住居跡5棟と掘立柱建物跡7棟・工房跡とみられる竪穴状遺構などが検出されている。

12世紀の遺物を伴出する建物や溝跡の出る遺跡は古城林遺跡・彼岸田遺跡・田高II遺跡・安久沢東遺跡等があり、平泉文化の広がりを示す資料が増加してきている。

中世は奥州市中畠城跡・彼岸田遺跡・田高II遺跡・安久沢東遺跡・古城林遺跡・二戸市不動館跡（11）などがある。中畠城跡は、安永風土記に樅山館と記載されている居館で、内堀1条・外堀4条が巡らされ、外堀が格子状に仕切られた「障子堀」という極めて珍しい堀がめぐらされていることが明らかになった。不動館跡は、主郭を中心に調査され、曲輪2・帶曲輪2・腰曲輪4・土塁1・切岸3・空堀4・犬走り3などが作られており、曲輪から竪穴建物4・住居状遺構6・竪穴状遺構7などとともに陶器類や石器類・鉄製品が多く出土した。鍛冶関連遺物が出土した竪穴状遺構もある。

近世以降では、盛岡市矢盛遺跡（2）で掘立柱建物跡3棟や近世陶磁器が検出され、奥州市古城林遺跡や彼岸田遺跡・田高II遺跡・安久沢東遺跡・二又遺跡などからも建物跡が検出されている。また、笹平遺跡（1）からは道路跡が検出されている。

（調査第一課長 佐々木清文）



I 発掘調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(1) 笹平遺跡及び奥州道中

所 在 地：盛岡市玉山区門前寺字笹平1-77-1ほか
 委 託 者：国土交通省東北地方整備局北上川ダム
 統合管理事務所
 事 業 名：四十四田ダム堰堤改良事業
 発掘調査期間：平成23年4月18日～5月31日

遺跡コード・略号：KE77-1005・TSSD-11
 調査対象面積：1,600m²
 調査終了面積：1,470m²
 調査担当者：丸山浩治・村上 拓

1 調査に至る経過

笹平遺跡及び奥州道中は、四十四田貯砂ダム事業の実施に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

四十四田ダムは、北上川本川に昭和43年に完成した洪水調節・発電を目的とした多目的ダムである。

四十四田ダムでは、流入土砂による堆砂の進行が顕著であり、計画堆砂容量に対する堆砂率は、平成22年時点では86%にまで進み、近い将来には堆砂量が計画堆砂容量に達し、ダム機能の低下が懸念されることから、可及的速やかな堆砂対策の実施が必要となっている。

このため、四十四田ダムへの流入土砂を抑制するための対策として、盛岡市玉山区門前寺字笹平地内に四十四田貯砂ダムを整備するものである。

笹平遺跡については、過年度において岩手県教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。笹平遺跡については、平成22年度に試掘調査を実施している。また、笹平遺跡に隣接する道路跡は、奥州道中跡であることが確認されていることから、岩手県教育委員会教育長と国土交通省東北地方整備局北上川ダム統合管理事務所長が協議を行った結果、発掘調査を公益財団法人岩手県文化振興事業団への委託事業とすることとした。

(国土交通省東北地方整備局 北上川ダム統合管理事務所)



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地（第1・2図）

遺跡は、IGRいわて銀河鉄道滝沢駅の北東約1.4kmに位置し、北上川に隣接する狭い谷底平野上に立地している。現況は牧草地で、標高は170~174mである。

3 基本層序（第3図）

調査区は東区と西区の2箇所に分かれ、東区には奥州道中を含む。基本層序は共通であるが、地形改変・削平のために東区南西部ではII~IV層が、奥州道中および西区北部ではII~V層が欠落する。

I層：a・bに細分。

I a層…10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱・し
まり中 層厚15~20cm現表土。

I b層…現代盛土。II層以下が混在。

II層…10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性弱・しま

り中 0~15cm。東区東部にのみ残存。刈屋スコリア含む。

III層：a~cに細分。いずれも東区東部にのみ残存。

III a層…10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性弱・しまり中 0~25cm。

III b層…10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱・しまり弱 0~15cm。十
和田aテフラ30%含む。

III c層…2.5Y7/4 浅黄色 テフラ 粘性無・しまり中 0~10cm。
十和田aテフラ。

IV層…10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中 25~50cm。全体
に生出スコリア散在。

V層…10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中 25~30cm。

VI層…10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 層厚不明。遺構検出面。東区は本層上面で、西区は層
中で検出。

4 調査の概要

(1) 遺構（第1表、第4~8図、写真図版1~4）

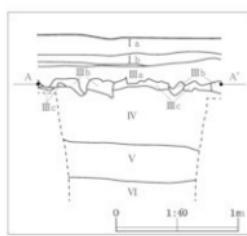
検出された遺構は、フラスコ形土坑3基、陥し穴状遺構（溝形）5基（以上縄文時代）、住居状遺構1基、陥し穴状遺構（長楕円形）1基（以上古代）、道路1条（以上近代以降）である。時代の新しいものから記述する。遺構規模は第1表遺構計測表を参照いただきたい。

a) 道路（R Z001）

いわゆる奥州道中で、笹平地区では北西→南東方向に直線的にのびる。調査区南東側約50mには笹平一里塚が現存する。現況から自然地形を改変・開削している様子が確認された。堆積土と路盤、側溝、敷設時の工事痕跡等を層位的に確認するため、路線横断方向（北東→南西）にトレントを3本設定した（北・中・南トレント）。結果、現路面下約30cmでおもに5~10cm大の円礫を敷いた路盤が検出された。これより上位は現代（昭和）の廃棄物と周辺崩落土の互層で、路盤構築土中にも同様の廃棄物が混在する状況であった。同構築土下はVI層となり、結果、路盤は昭和に構築・使用された1面



第2図 周辺の地形



第3図 基本層序

以外に残存しないことが判明した。道路両端には側溝が設けられており、路盤構築土より古期の埋土が底面直上に存在することを確認した。法面は、Ⅱ層およびⅠ層が崩落したと考えられる黒色土が15~60cm堆積しており、その下はⅥ層となる。3本のトレンチいずれも同様相であった。

この結果を受け、第1段階として昭和路盤までの掘削とその精査、第2段階として路盤構築土の除去とⅥ層面（路面下・側溝・法面）における昭和以前の痕跡確認を調査区北半で実施した。路盤は礫敷きであるが、道路中央とやや西よりから2条検出された轍痕の間が最も密集しており、それ以外は比較的疎である。轍は轍にも堆積している。この状況から、轍は道路状況の改善を目的として轍周辺に意図的に多く敷かれたものと思われる。当初から礫敷きでそれを補修したのか、状況悪化とともに新たに敷かれたのか、それは不明である。路盤構築土上面から寛永通寶が2点出土したが、昭和の廃棄物と混在した状態であった。側溝は断面観察から5時期の変遷がみられ、19・20・25・27層は路盤構築以前の構築・使用痕跡である。しかし、東側溝底面から現代の磁器が出土し（5）、溝の使用年代も現代ということが判明した。この他、法面からも開削以外の構造物痕跡は確認されず、以上の結果から調査区北半には近世奥州道中の痕跡が残存しないことが明らかとなった。これは、近代以降に拡幅がなされたためと考えられる。調査区南半についてもトレンチ調査の結果から北半と同様の状況であるのは明らかで、近現代の痕跡以外は望めないため、全面掘削を行わずトレンチ調査に止めた。

b) 住居状遺構（R E001）

西区北半部に位置する。平面は不整な隅丸方形を呈する。底面中央南東側に不整形の弱い焼土があり、南東壁際には凝灰岩質の轍（15cm大）と白色粘土の集積が広がる。この集積には煙道が伴わず、焼成痕もないためカマドではなく、性格不明である。一方、この対辺には筒状の物体を立てたような痕跡が見つかり、その上位36cmには焼土が形成されていた。おそらく煙突状の施設と思われる。構築時期は、埋土中にTo-aテフラが混入していることから古代と考えられるが、詳細は不明である。

c) 陥し穴状遺構（長楕円形 R D007）

東区東部に位置する。平面は長楕円形を呈し、長軸方向はN-92°-Wを向く。底面西端の両隣に各1本、同東端中央に1本、計3本の斜穴が検出された。埋土は、溝形の陥し穴状遺構に比して黒色土と褐色土の層境が明瞭で、堆積時期の新しさが窺える。形態的特徴からも、古代の所産と推定される。

d) フラスコ形土坑（R D001~003）

3基とも西区北半部に位置する。R D001と002は重複しており、001が002より新しい。ただし、形態の類似性から構築時期が大きく隔たると考えにくい。R D003は、埋土の状況から人為的に埋め戻されたものと推定される。出土遺物はないものの、形態的特徴から縄文時代の所産と思われる。

e) 陥し穴状遺構（溝形 R D004~006・008・009）

東区東部で3基、同西部で1基、西区北半部で1基検出された。長軸方向は、東区の4基はN-80°-95°-Wを、西区の1基はN-4°-Eを向き、前者は傾斜に対し長軸が並行、後者は直行する点で異なる。埋土の様相および遺構形態から、縄文時代の所産と推定される。

（2）遺物（第2表、第9図、写真図版5）

寛永通寶2点・2.2g、土師器片5点・142.1g、縄文土器片7点・135.0g、石器2点・2155.2g、他に一銭銅貨1点、現代の陶磁器片、鉄製品、ガラス製品、プラスチック製品等が出土した。1~8・11・12は奥州道中内出土である。1・2は路盤上面出土の寛永通寶で、1はいわゆる新寛永、2は古寛永の可能性がある。3~7は現代の廃棄物で、3・4は路盤構築土から、5は東側溝底面から、6は西側溝12層から、7は路盤上位廃棄物層から出土した。8は西側溝12層から出土した縄文土器鉢底部片である。11・12は縄文時代の轍石器で、11は凹石、12は台石である。いずれも側溝埋土から

(1) 篠平遺跡及び奥州道中

出土した。9・10は遺構外出土で、9は縄文土器（後期）の鉢口縁部、10は土師器壺底部である。

5まとめ

今回の調査で、当該付近の奥州道中は近世の構築痕跡を残しておらず、少なくとも近代以降の拡幅を受け、残存路盤は昭和まで使用されていたことが判明した。拡幅時期がいつなのか、それを推定する具体的な物的資料はないが、1876（明治9）年と1881（同14）年の明治天皇東北巡幸に伴い、馬車通行のため各所で道路幅を2間（3.6m）にする拡幅が行われたとされ（岩手県1940ほか）、当該域もその工事がなされた可能性がある。

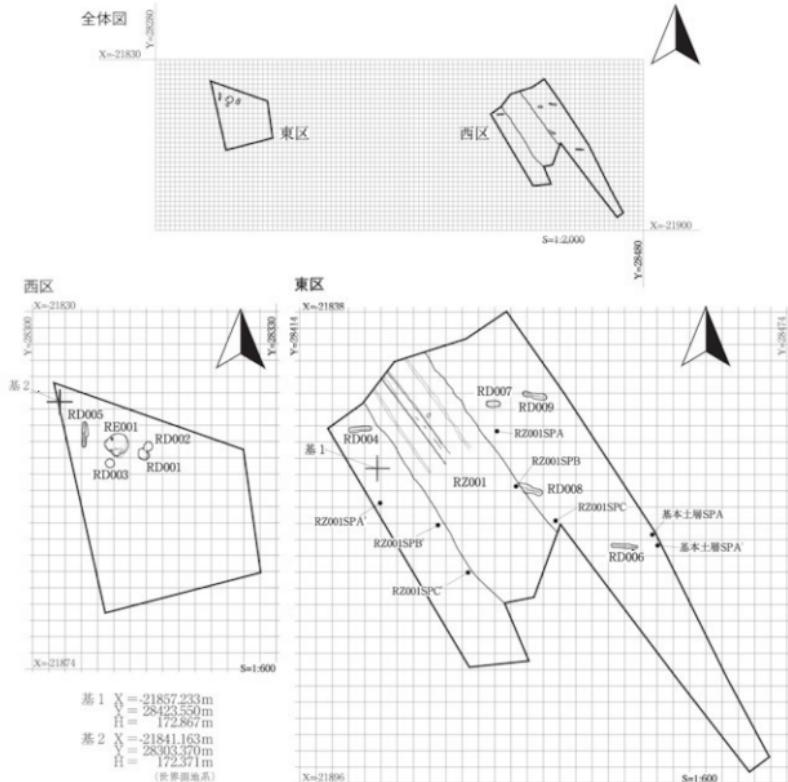
この他、当該域は縄文時代および古代に狩猟場として用いられていたことが判明した。加えて、住居状遺構の存在と土師器壺片の出土から、古代には居住域としても利用されていたと思われる。

なお、篠平遺跡及び奥州道中に関わる報告はこれをもって全てとする。

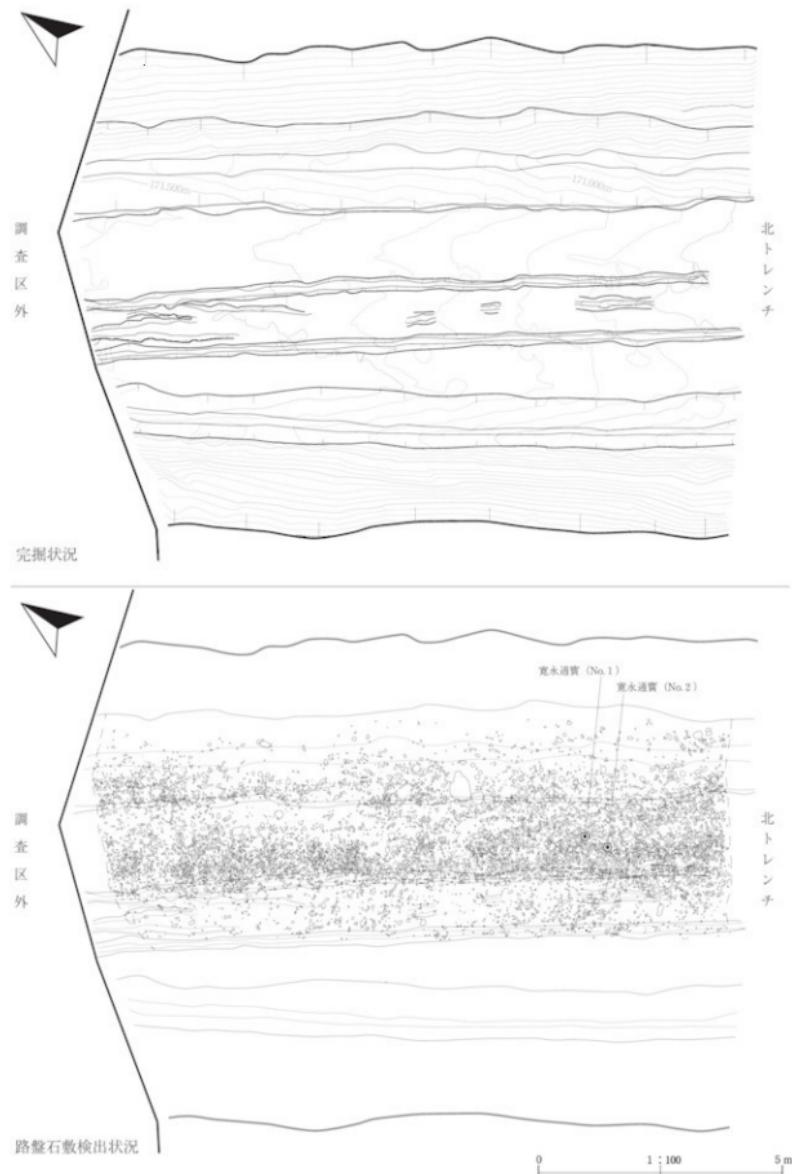
<引用・参考文献>

岩手県 1940『明治九年岩手県御巡幸録』岩手県庁

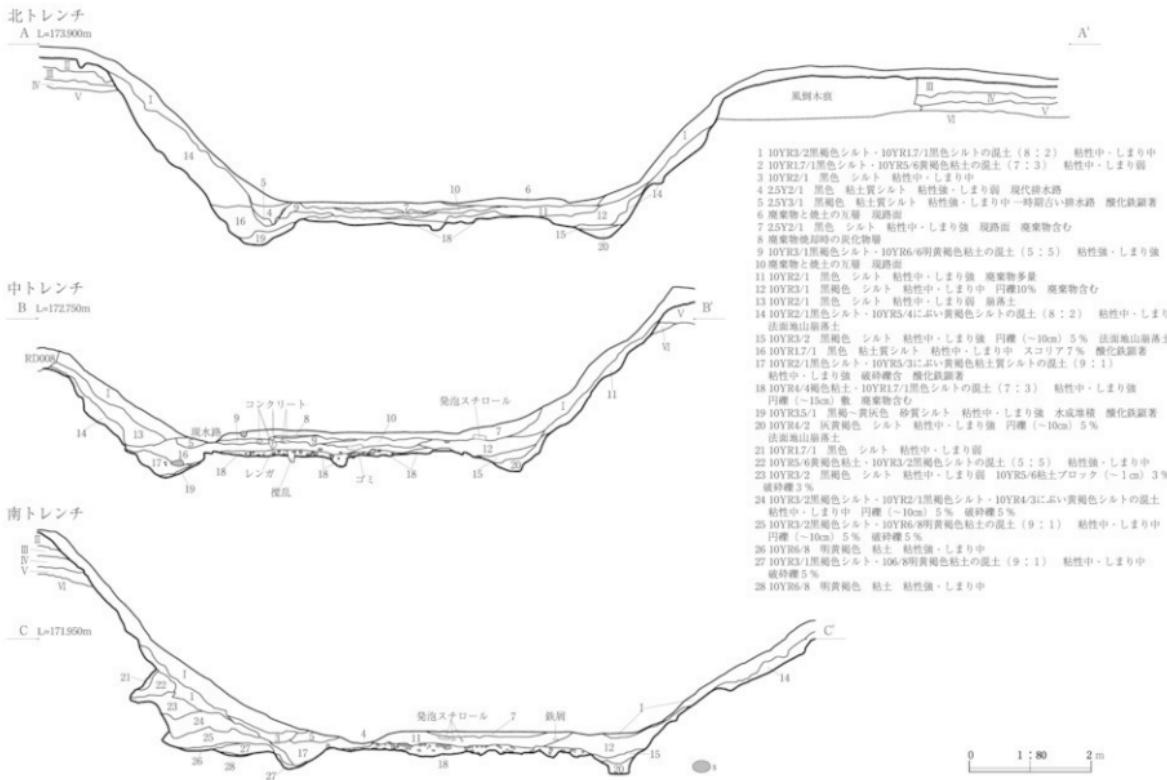
一戸町教育委員会 2009『奥州街道整備事業報告書』一戸町文化財調査報告書第65集



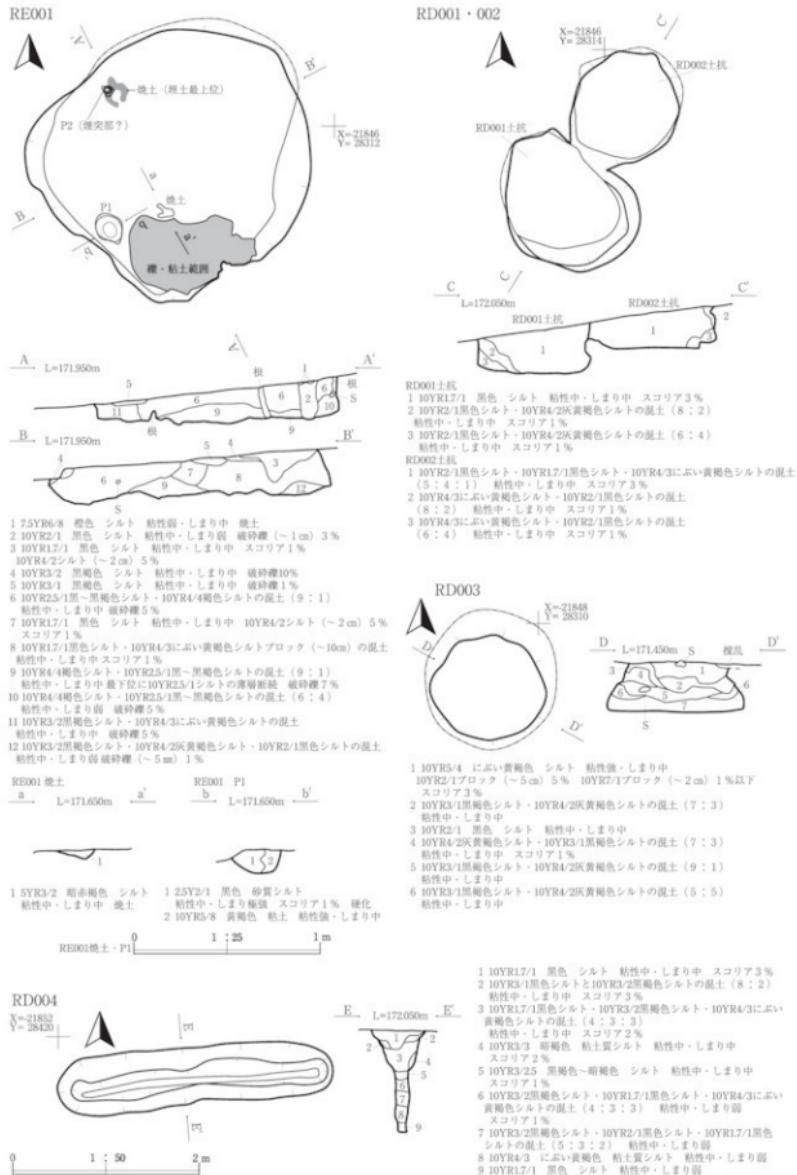
第4図 遺構配置図



第5図 RZ001奥州道中（1）

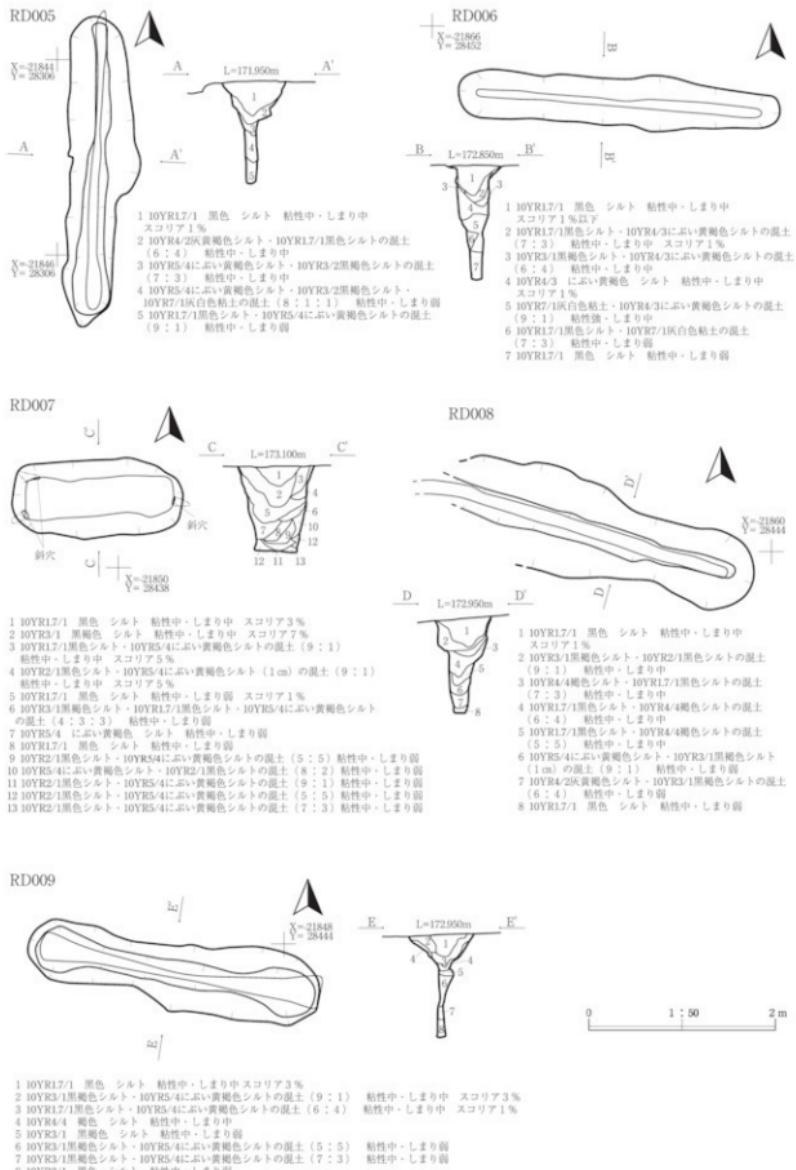


第6図 R2001奥州道中 (2)



第7図 RE001、RD001~004

(1) 篦平遺跡及び奥州道中

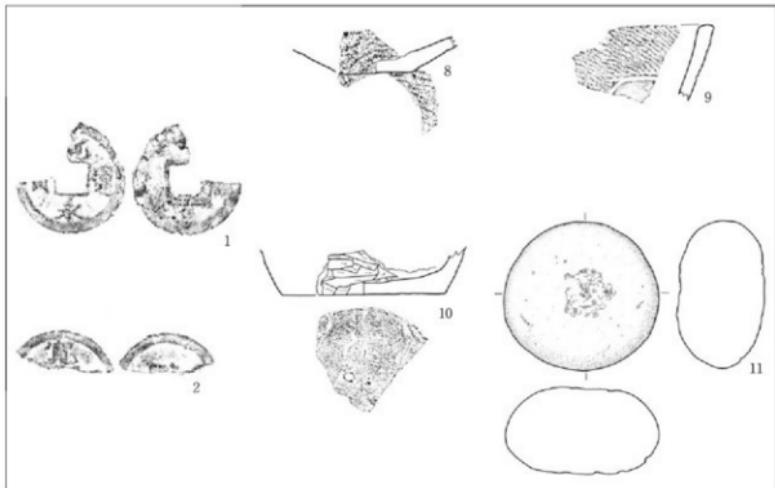


第8図 RD005~009

第1表 遺構計測表

単位はすべてcm

遺構名	道路現況						昭和路盤使用時					
	東側溝			西側溝			東側溝			西側溝		
	上幅	路盤幅	高さ	上幅	下幅	深さ	上幅	路盤幅	高さ	上幅	下幅	深さ
RZ001道路跡 (奥州道中)	980~1010	405~455	332	69	17	43	975~1265	350~380	348	84	32	32
遺構名	開口部径	底面径	深さ	遺構名	開口部径	底面径	深さ					
RE001住居状	291×282	275×240	67	RD005陥し穴	315×71	305×16	122					
RD001土坑	160×120	134×102	61	RD006陥し穴	330×58	293×11	121					
RD002土坑	117×108	119×113	45	RD007陥し穴	175×81	152×44	92					
RD003土坑	119×107	140×136	61	RD008陥し穴	360以上×108	330以上×14	107					
RD004陥し穴	283×62	245×9	107	RD009陥し穴	302×75	292×35	122					



第9図 出土遺物

第2表 遺物観察表

No.	出土地点	器種	計測値(cm)	カッコは残存値	重量(g)	備考
1	RZ001 路盤①	銭貨	長さ(2.3) 幅(2.2)	厚さ 0.1	1.6	寛永通寶 新寛永
2	RZ001 路盤②	銭貨	長さ(2.0) 幅(0.8)	厚さ 0.1	0.6	寛永通寶 古寛永?
3	RZ001 路盤構築土(18層)	磁器・碗	口径 10.7 底径 4.3 高さ 5.4		118.7	近現代 写真のみ掲載
4	RZ001 路盤構築土(18層)	ガラス・化粧品容器	口径 4.7 底径 5.9 高さ 3.3		116.0	近現代 写真のみ掲載
5	RZ001 東溝底面	磁器・碗	口径 10.9 底径 3.9 高さ 4.8		117.3	近現代 写真のみ掲載
6	RZ001 西溝(12層)	鉄器・鉄瓶弦	—	—	20.4	近現代 写真のみ掲載
7	RZ001 現代擾乱	アルミ・水筒	幅 14.3 厚さ 7.0 高さ 19.1		249.5	近現代 刻印「ユーフー」写真のみ掲載
8	RZ001 西溝(12層)	繩文土器・鉢類	— 底径 4.5	—	46.6	底部 LR
9	遺構外1層(RZ001西側)	繩文土器・鉢類	— — —	—	33.7	口縁部 磨消繩文・RL
10	遺構外(生文課トレンチ内)	土師器・壺類	— 底径 10.0	—	67.0	底部 制部ケズリ 底面木葉痕
11	RZ001 西溝(20層)	石器・凹石	長さ 9.3 幅 9.6 厚さ 5.5		602.9	片面に凹痕
12	RZ001 東溝(16層)	石器・台石	長さ 19.7 幅 13.8 厚さ 5.5		1552.3	片面に使用痕 写真のみ掲載

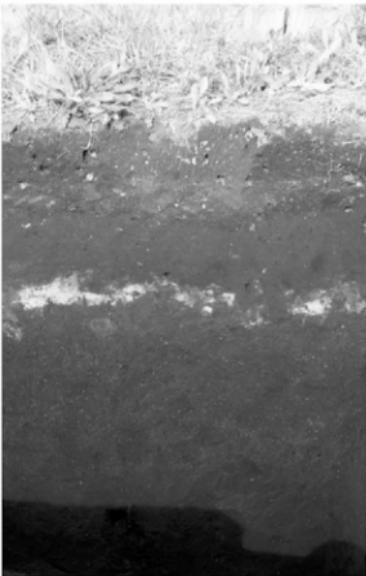
(1) 笹平遺跡及び奥州道中



遺跡遠景（南から）



精査風景（西から）



基本土層（東区・西から）



RZ001奥州道中 現況（北から）

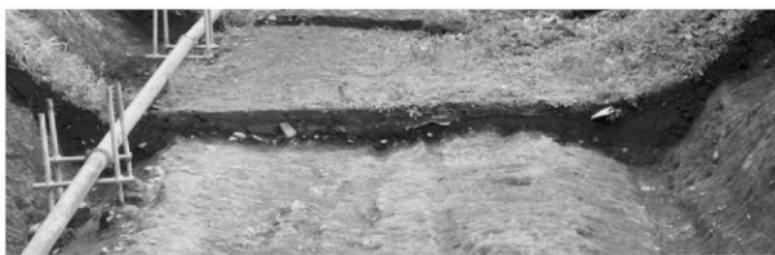
写真図版1 遺跡遠景、基本土層、RZ001（1）



RZ001奥州道中 路盤検出状況（北から）



RZ001奥州道中 実掘（北から）



RZ001奥州道中 北断面（北から）

写真図版2 RZ001 (2)

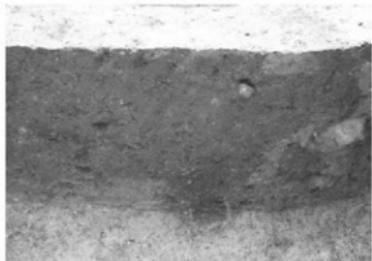
(1) 篠平遺跡及び奥州道中



RE001 住居状遺構 平面（南東から）



RE001 住居状遺構 破・粘土集積（北西から）



RE001 住居状遺構 煙道部?断面（北東から）



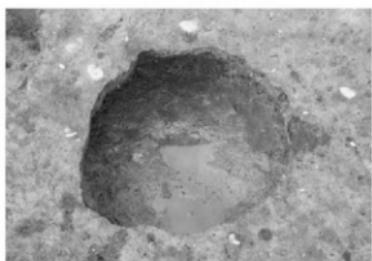
RD001・002 土坑 平面（東から）



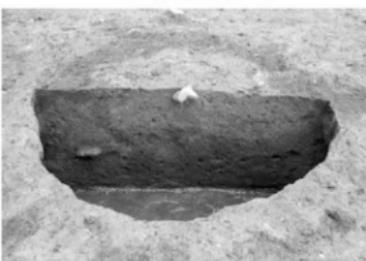
RD001 土坑 断面（東から）



RD002 土坑 断面（東から）



RD003 土坑 平面（南から）



RD003 土坑 断面（南から）

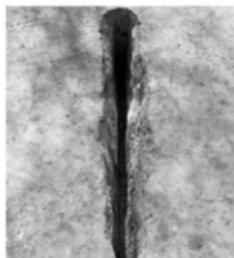
写真図版3 RE001、RD001~003



RD004 陥し穴状遺構 平面（西から）



RD005 陥し穴状遺構 平面（南東から）



RD006 陥し穴状遺構 平面（東から）



RD004 陥し穴状遺構 断面（西から）



RD005 陥し穴状遺構 断面（南東から）



RD006 陥し穴状遺構 断面（西から）



RD007 陥し穴状遺構 平面（東から）



RD007 陥し穴状遺構 底面端ビット（東から）



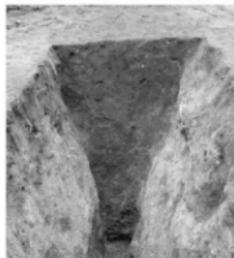
RD008 陥し穴状遺構 平面（東から）



RD007 陥し穴状遺構 断面（東から）



RD007 陥し穴状遺構 底面端ビット（西から）



RD008 陥し穴状遺構 断面（東から）

写真図版4 RD004～008



1・2 S=1:1
その他 S=1:3

(2) 矢盛遺跡 第29次調査

所 在 地：盛岡市向中野字野原42-10ほか

委 託 者：盛岡市

事 業 名：盛岡南新都市土地区画整理事業

発掘調査期間：平成23年7月1日～7月29日

遺跡コード・略号：LE26-0139・IYM-11-29

調査対象面積：2,797m²調査終了面積：2,797m²

調査担当者：杉沢昭太郎・金子昭彦

1 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（当時）の三者が地域振興整備公団（現・独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受け公団が実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って本調査を必要とする範囲を確定した上で、公益財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることになった。

矢盛遺跡第29次調査は、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成23年度の事業として確定した。これを受け、平成23年に公益財団法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市との間で受託契約を締結した。

(盛岡市)



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地

遺跡は盛岡市の南西部にあり、JR東北本線盛岡駅から南に約3km、仙北町駅から南西約1.8kmに位置している。零石川によって形成された沖積段丘上及び周囲の旧河道を含む地形に立地する。標高は122m前後である。

3 基本層序

I層 現在の表土・盛土（層厚20~60cm）、II層 黒褐色土 旧表土で残りは良くない（層厚0~20cm）、III層 黄褐色土 地山（層厚20~60cm）、IV層 黄褐色砂礫層 調査区のほぼ全域に見られる（層厚10~40cm）、V層 黄褐色砂層 部分的に見られる（層厚0~30cm）

遺構はIII層上面で検出・精査している。これより下層では遺構・遺物はみられなかった。



第2図 24次までの調査区と今年度調査区

4 調査の概要

（1）遺構

掘立柱建物跡

R B 065掘立柱建物跡（第5図・写真図版2）

【位置・検出状況】調査区北西端に位置し、III層上面で検出された。擾乱が多く全ての柱穴を把握しているわけではない。

【重複関係】他遺構との重複はない。

【規模平面形】桁行き11.80m（7間）、梁行5.76m+4.12m（4.5間）で南東側に張出しを有する所謂曲屋の形態となる。柱間寸法はばらつきが多い。

【建物の方向】建物自体が歪んでいるが大凡N-20°-Wとなる。

【その他】北西端部がダイドコロ、その東隣がジョイ、さらに東がザシキ、ダイドコロの南がドマ、さらに南がウマヤと考えられる。

【出土遺物】柱穴からは出土していない。

【時期】18世紀後半から19世紀の可能性がある。

R B 066掘立柱建物跡（第6図・写真図版3）

【位置・検出状況】調査区の北側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。搅乱が周間に多く見られたこと、南側が地形的に低くなることから、すべての柱穴を把握することはできなかった。

【重複関係】他遺構とは重複していない。

【規模平面形】桁行き約9.95m（5間）、梁行き約6.55m（3間）+4.45m（2.5間）で北側に張出しを有する所謂曲屋の形態をしている。建物は歪みがあるものの柱筋の通りは良い。

【建物の方向】建物が歪んでいるが概ねN-29°-Wとなる。

【その他】北西端部がウマヤ、それ以外の南から東側がオモヤと想定した。ウマヤの桁行き部分、オモヤの北側梁行きは半間ごとに柱穴を配置している。ウマヤとオモヤが直交しないことから、どちらかが先に建てられて、どちらかが後から取り付けられたのかもしれない。

【出土遺物】柱穴からは出土遺物なし。

【時期】本遺構の近くからは18世紀後半から19世紀の陶磁器が出土しているので本遺構もこの時期と考えたい。

土坑

検出された遺構の特徴については観察表にまとめた。土坑以外の遺構も観察表に整理した。

第1表 土坑類観察表

遺構名	位置	検出面	規模 長軸、 短軸、深さ	形状 底面	埋 土	出土遺物 時期	計測値の単位：cm	
							国版 写真図版	
RD282	調査区北西	Ⅲ層	80.70.20	円形 凹凸あり	黒褐色土主体の自然堆積。	なし。 時期不明。	8 3	
RD283	調査区北西	Ⅲ層	104.78.16	不整形円形 平坦	川原石を含む黒褐色土で 自然堆積。	なし。 時期不明。	8 3	
RD284	調査区南	Ⅲ層	212.94.18	不整形 凹凸あり	黒褐色土主体の自然堆積。	なし。 時期不明。	8 4	
RD285	調査区北東	Ⅲ層	206.106.44	長円形 平坦	黒褐色土と暗褐色土から なる自然堆積。	なし。 縄文が。	8 4	
RD286	調査区南	Ⅲ層	123.78.27	不整形円形 平坦	黒色土と暗褐色土からな る。自然堆積か。	なし。 時期不明。	8 4	
RD287	調査区南	Ⅲ層	141.103.20	不整形円形 凹凸	黒褐色土と褐色土からな る自然堆積。	なし。 時期不明。	8 4	

焼土

第2表 焼土観察表

遺構	位置	検出面	規模 長軸、 短軸、深さ	形状	被熱土、性格	出土遺物 時期	計測値の単位：cm	
							国版 写真図版	
R F 014	調査区北	Ⅲ層	57.43.8	不整形円形	にぶい赤褐色。 現地性。	なし。 時期不明。	8 5	

溝跡

第3表 溝跡観察表

遺構名	位置 グリッド	立地 検出面	規模 短軸、深さ	方向	埋 土	計測値の単位: cm	
						出土遺物 時期	図版 写真図版
R G 086	調査区北西	Ⅲ層	310.44.8	北-南	黒褐色土の单層。自然堆積。	なし。 時期不明。	9 5.6
R G 087	調査区北西	Ⅲ層	2000.67.28	北-南-西	川原石を含む黒褐色土。自然堆積。	なし。 時期不明。	9 5.6
R G 088	調査区北西	Ⅲ層	480.43.14	南西-北東	川原石を多量に含む黒褐色土。自然堆積。	なし。 時期不明。	9 5.6
R G 089	調査区北西	Ⅲ層	690.31.13	南西-北東-北	川原石を底面近くに多く含む黒褐色土。自然堆積。	なし。 時期不明。	9 3.5

(2) 遺物

陶磁器類・石器類・鉄製品合わせて小コンテナ0.5箱の遺物が出土している。

今回の調査区の現況は民家及びその屋敷ほかにあたり、多量の近現代遺物があった。野外調査中にこれらの遺物を仕分け・分類し19世紀及びそれより古い遺物のみを持ち帰ることとした。持ち帰った遺物の中から遺構の時期に近いと判断される陶磁器と鉄製品を掲載した。

各遺物の諸特徴については遺物観察表にまとめている。

5 まとめ

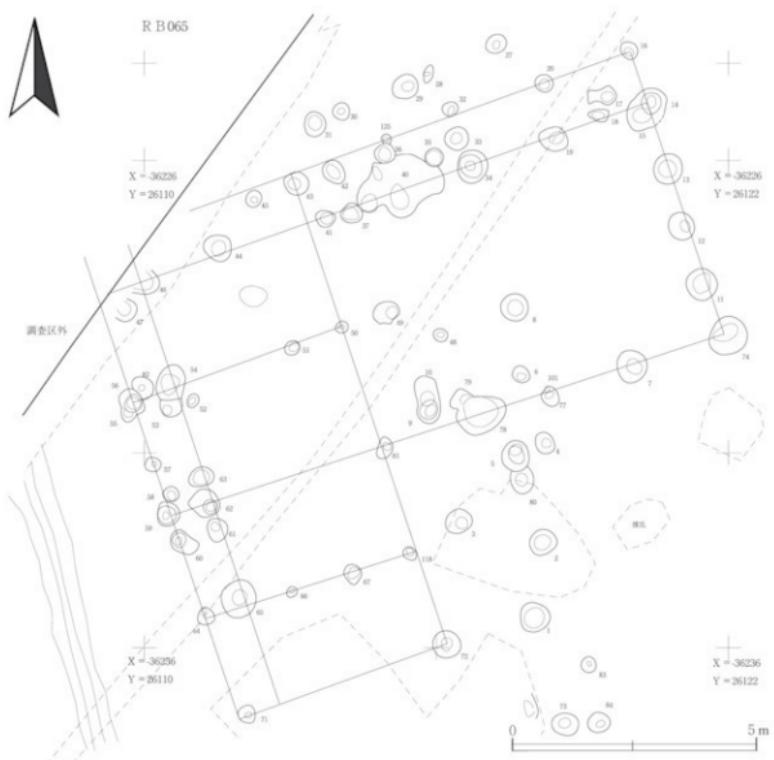
- ・29次調査区は矢盛遺跡の北端部にあたる。
 - ・29次調査区に隣接する周辺の調査では、近世民家・墓、縄文時代の陥し穴等が見つかっている。
 - ・今回の調査で近世の建物跡が2棟把握された。何れの建物も「曲屋」のような形態をしている。擾乱により残りは良いとはいえないものの、現存する「曲屋」とはその柱配置などに異なる部分も多くあり、「曲屋」の系譜や展開を考える上で興味深い事例といえる。時期は18世紀後半から19世紀前半であろう。
 - ・本遺跡は縄文時代には狩猟の場であるが、今年度調査区で陥し穴は検出されなかった。
 - ・本遺跡は中世後半になって遺跡南側に小規模な居館と集落が形成される。その後、近世になって飯岡新田という村落ができるわけだが、これまでの遺跡調査の成果では中世後半にあった居館・集落から近世初頭へと移行する段階の遺構は見つかっていない。このことから中世後半に営まれていた居館と集落が近世初頭には断絶し、一旦この地域は無宿の状態になったと推察され、18世紀になり改めて飯岡新田の集落が開かれたと解釈される。この地域における集落の中世後半から近世初頭への遷り変わりについては未解明の部分がまだ多い。
- なお、矢盛遺跡第29次調査に関わる報告はこれをもって全てとする。



第3図 遺構配置図と周辺地形



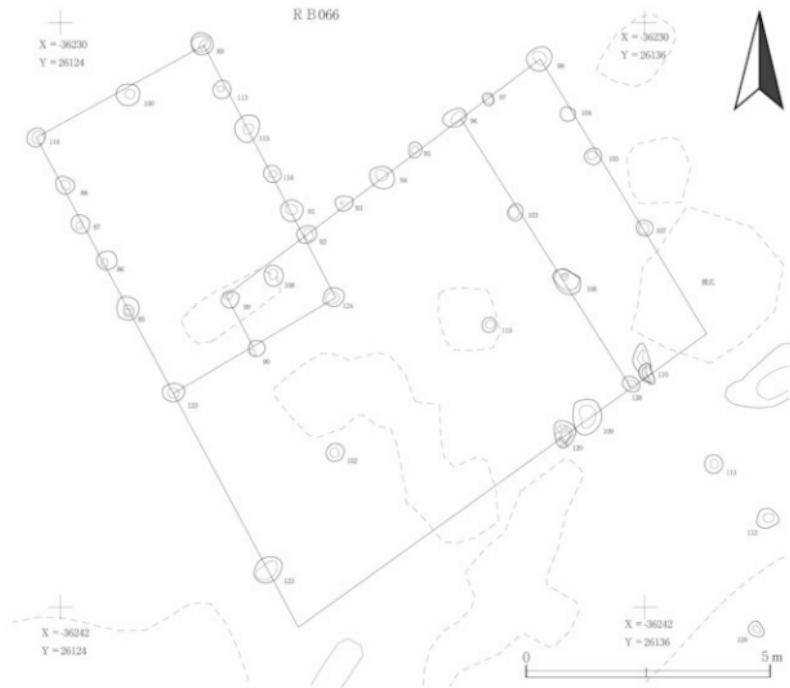
第4図 遺構配置図



第4表 柱穴計測表

柱穴番号	深さ(m)	柱穴番号	深さ(m)	柱穴番号	深さ(m)	柱穴番号	深さ(m)
1	0.578	26	0.08	49	0.588	73	0.283
2	0.315	27	0.132	50	0.16	74	0.668
3	0.584	28	0.28	51	0.363	75	0.336
4	0.351	29	0.395	52	0.157	76	0.278
5	0.412	30	0.214	54	0.61	77	0.421
6	0.376	31	0.489	55	0.358	78	0.446
7	0.663	32	0.262	56	0.925	80	0.48
8	0.384	33	0.257	57	0.172	81	0.484
9	0.698	34	0.523	58	0.409	82	0.168
10	0.433	35	0.445	59	0.243	83	0.12
11	0.337	36	0.266	60	0.387	84	0.271
12	0.46	37	0.57	61	0.549	85	0.412
13	0.497	38	0.534	62	0.558	86	0.364
14	0.643	39	0.568	63	0.536	87	0.492
15	0.452	40	0.507	64	0.233	88	0.287
16	0.153	41	0.557	65	0.529	89	0.649
17	0.945	42	0.093	66	0.079	90	0.538
18	0.089	43	0.161	67	0.442	91	0.37
19	0.332	44	0.006	68	0.239	92	0.454
20	0.193	45	0.095	69	0.263	93	0.22
21	0.282	46	0.318	70	0.282	94	0.41
22	0.09	47	0.249	71	0.116	95	0.262
23	0.538	48	0.181	72	0.382	96	0.336

第5図 RB065

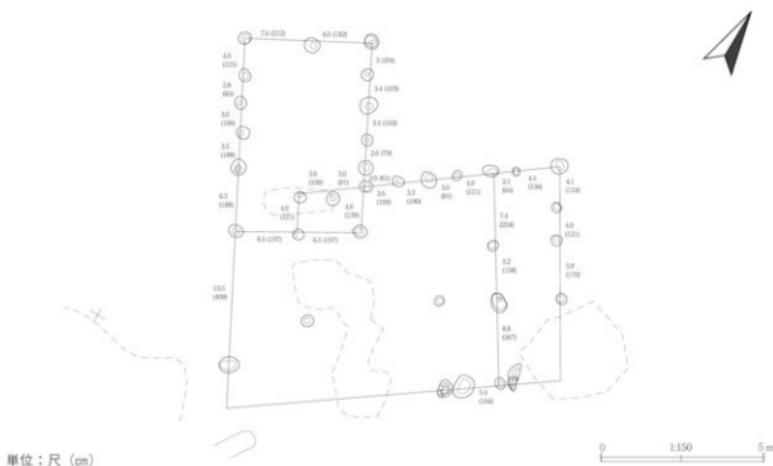
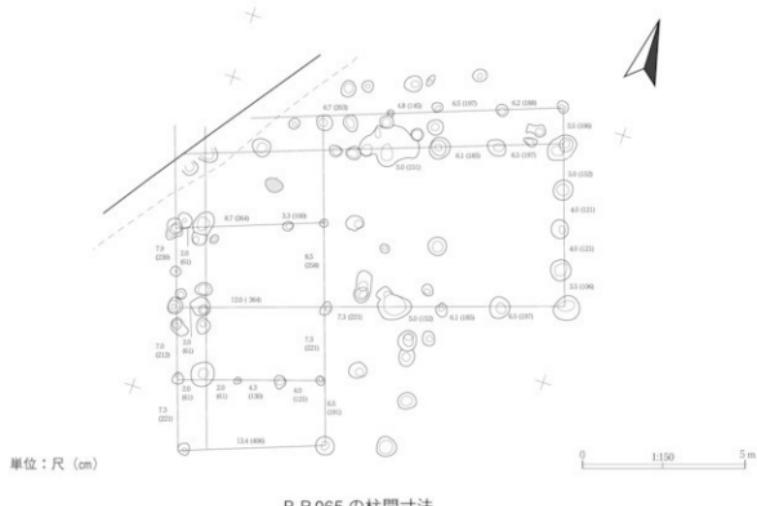


第4表 柱穴計測表2

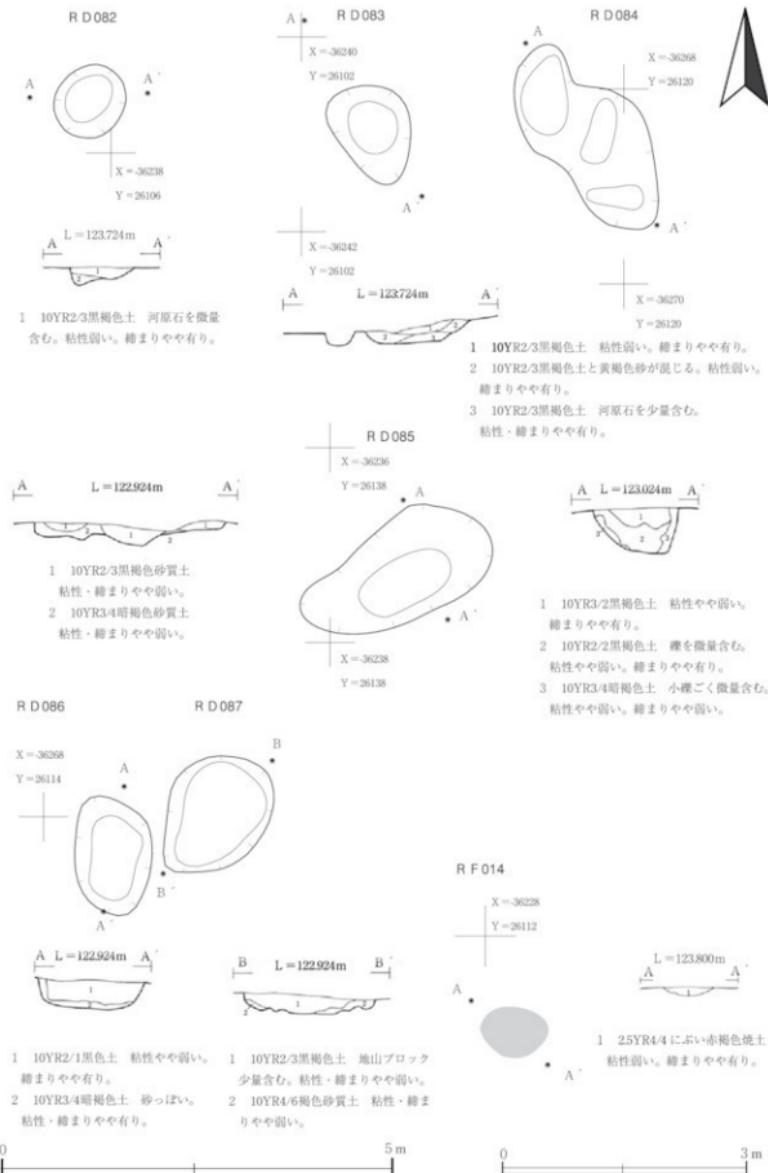
柱穴番号	深さ (m)
97	0.088
98	0.337
99	0.546
100	0.531
101	0.541
102	0.244
103	0.181
104	0.251
105	0.257
106	0.288
107	0.311
108	0.283
109	0.198
110	0.224
111	0.262
112	0.455
113	0.188
114	0.525
115	0.496
116	0.195
117	0.377
118	0.206
119	0.13

柱穴番号	深さ (m)
120	0.104
121	0.204
122	0.35
123	0.421
124	0.276
125	0.224
126	0.092
127	0.308
128	0.244

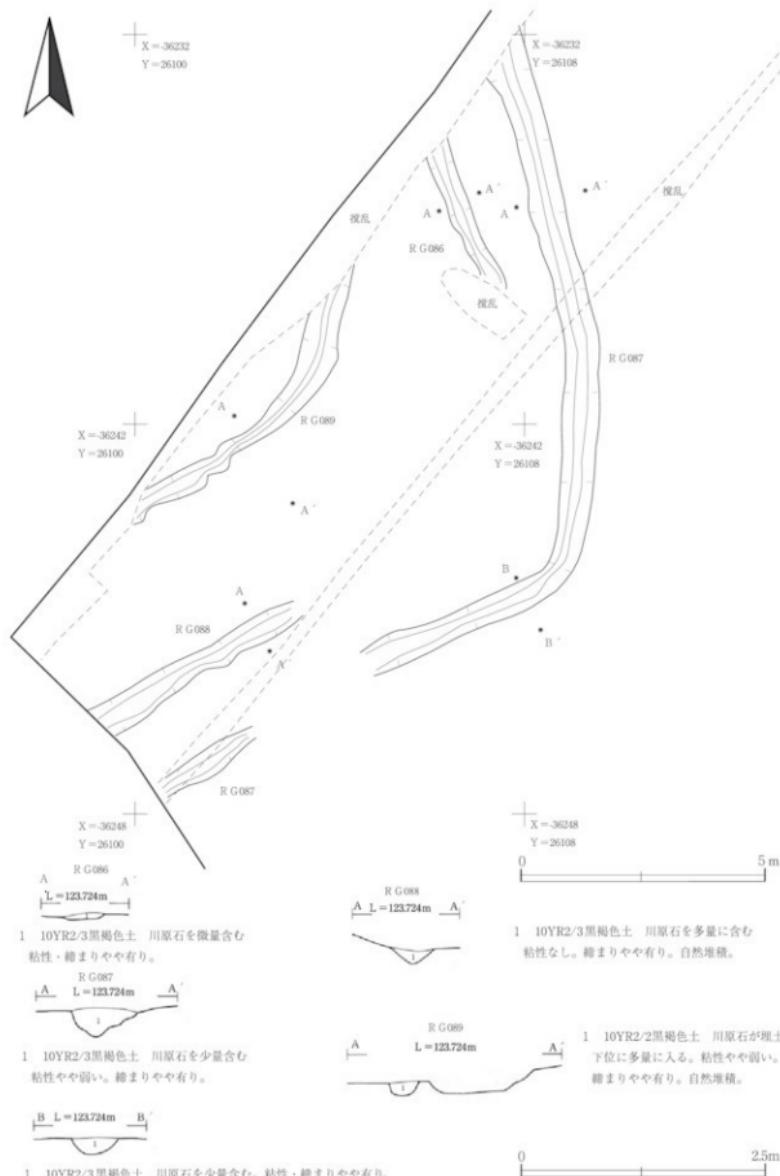
第6図 RB066



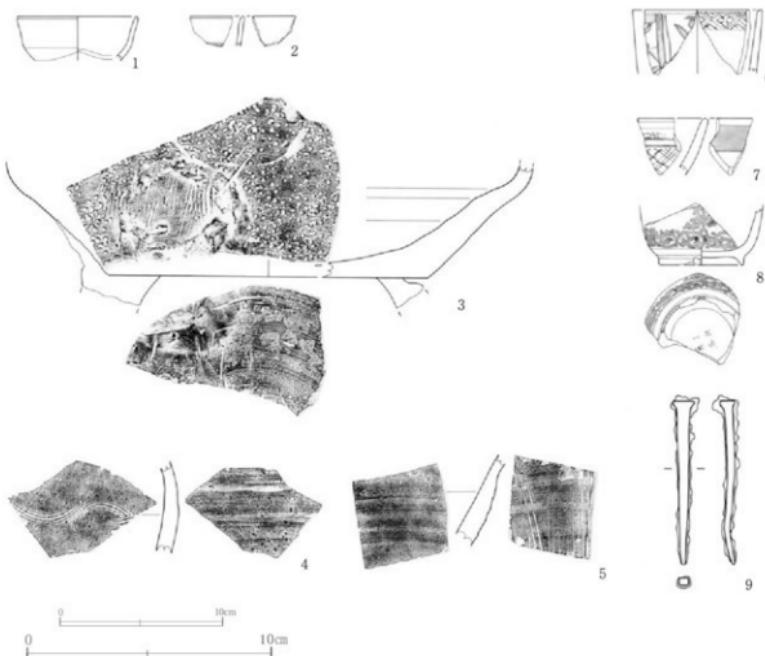
R B 066 の柱間寸法



第8図 RD082～087、RF014



第9図 RG086～089



第10図 出土遺物

第5表 陶磁器観察表

番号	出土地点	層位	種類	器種	法量(cm)			特徴	産地・年代	その他
					口径	底径	器高			
1	R G 087	埋土	陶器	小碗	7.4	-	(2.7)	灰釉	大輪相馬 18世紀	
2	P 62	埋土	陶器	碗	-	-	-	灰釉、鉄軸	大輪相馬 18世紀	R B 065
3	P 65	埋土	陶器	不明	-	19.6	-	無釉、刺突文	产地不明 19世紀か	焜炉、火鉢の類か
4	遺構外	Ⅲ層	陶器	壺類	-	-	-	黃土色の釉 柳描文	产地不明 19世紀か	
5	遺構外	Ⅲ層	陶器	擂鉢	-	-	-	焼き締め	产地不明 19世紀か	
6	遺構外	Ⅲ層	磁器	碗類	8.0	-	(3.9)	染付	肥前 18世紀後半	猪口か
7	遺構外	Ⅲ層	磁器	鉢類か	-	-	-	色絵	肥前 18世紀後半以降	
8	P 114	埋土	磁器	蓋付鉢か	-	5.2	(3.7)	染付	肥前 18世紀	壺類か

第6表 鉄製品観察表

番号	出土地点	層位	種類	長さ	幅	厚さ	特徴
9	P 84	埋土	角釘	6.9	1.2	1.1	



調査区南現況（南から）



調査区中央現況（南から）

写真図版 1 調査区現況



調査区全景（南から）



RB065平面（北から）

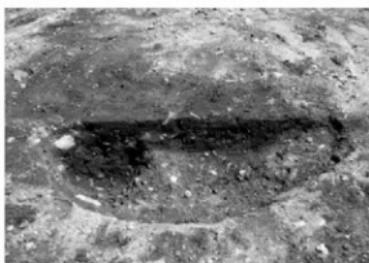
写真図版2 調査区全景・RB065



RB066 平面（北から）



RD282 平面（南から）



RD282 断面（南から）



RD283とRG089 平面（西から）



RD283とRG089 断面（西から）

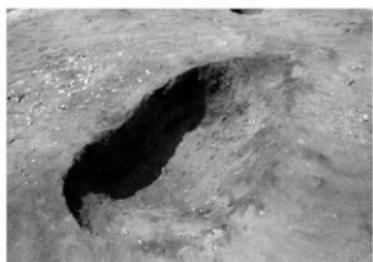
写真図版 3 RB066、RD282、283、RG089



RD284 平面（南から）



RD284 断面（西から）



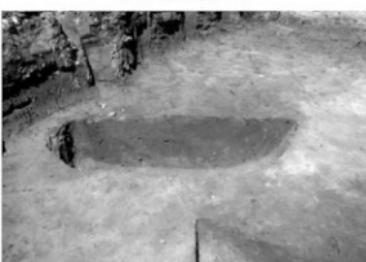
RD285 平面（南から）



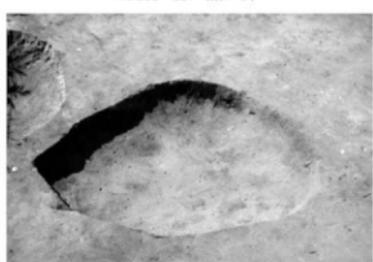
RD285 断面（西から）



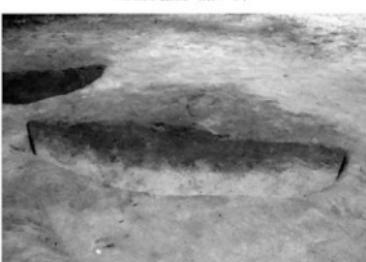
RD286・287 平面（東から）



RD286 断面（東から）

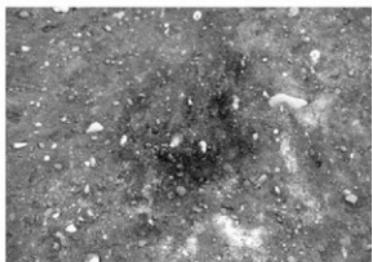


RD287 平面（南東から）

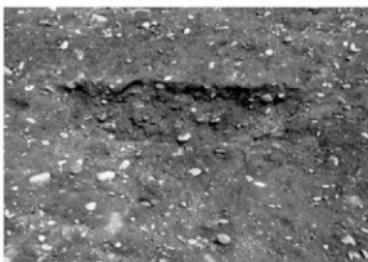


RD287 断面（南東から）

写真図版4 RD284～287



RF014 平面（南西から）

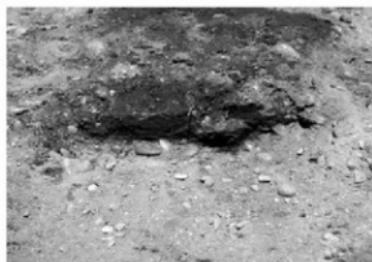


RF014 断面（南西から）



RG086～089 平面（南西から）

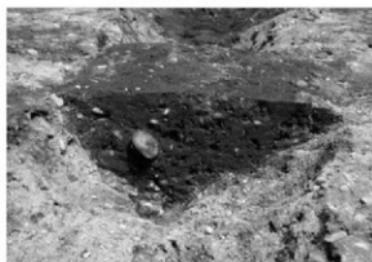
写真図版 5 RF014、RG086～089



RG086 断面（南西から）



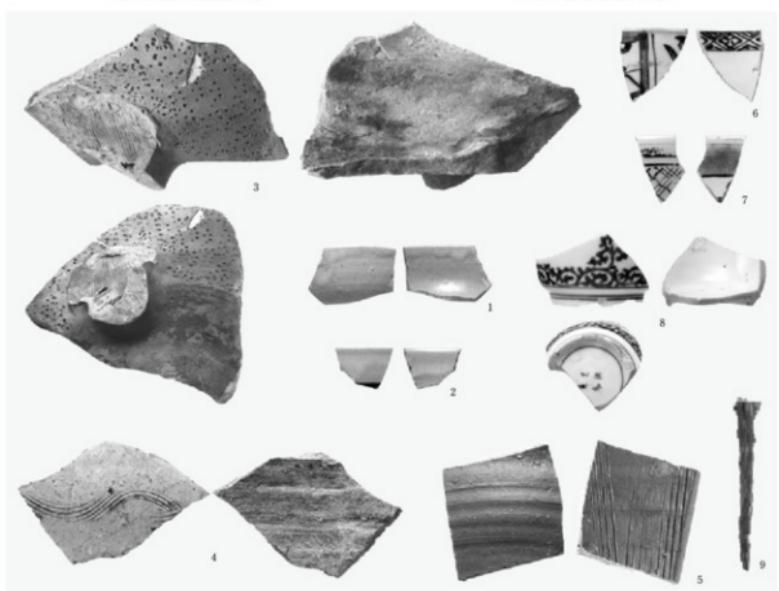
RG087 断面（南から）



RG087 断面（南西から）



RG088 断面（南西から）



写真図版 6 RG086～088、出土遺物

II 発掘調査概報

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(3) 芋田沢田IV遺跡 第3次調査

所 在 地：盛岡市玉山区芋田字沢田4-10ほか
 委 託 者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名：一般国道4号渋民バイパス
 発掘調査期間：平成23年6月1日～9月2日
 調査終了面積：1,100m²
 調査担当者：村上 拓・丸山浩治
 主要な時代：縄文



遺跡の立地

IGRいわて銀河鉄道好摩駅の東方約1.0km、北上川左岸の河岸段丘上に立地する。南北縁を段丘崖と沢に区切られた、西向きに張り出す舌状の高台である。標高は214m前後。要本調査範囲3,630m²のうち過年度末了分1,100m²を調査し、三ヵ年にわたった調査は今次をもって終了した。

調査の概要

今次調査では縄文時代住居跡40棟〔早期36、中期末～後期初4（方形柱穴列1含む）〕、炉跡5基、土坑5基、土器埋設遺構2基、柱穴600個等を検出した。出土遺物は縄文時代土器大コンテナ6（早期中葉～前期初頭、中期末葉～後期初頭）、縄文時代石器大コンテナ3（石鎚・敲磨器類・石皿ほか）、円盤状土製品3点等である。今次の対象区域は、過年度の成果から縄文時代早期の住居跡が密に分布することが予想されており、結果、多数の住居跡が魚鱗状に重複した状態で検出された。出土遺物は縄文時代早期中葉の土器を主体とし、これに前後する遺物も若干量認められることから、住居跡の大半は縄文時代早期中葉～前期初頭に帰属するものと思われる。ただし遺構の時期特定に有効な出土状況を示す遺物は少なく、加えて遺構埋土の識別が極めて困難なために新旧関係の把握が十分でないことから、個々の住居の詳細な帰属時期は明らかでない。住居跡は以下の3形態に分類できる。①平面形は円～楕円形。壁直下または壁面に内傾する柱穴をもつ。まれに床面中央付近に炉をもつ。②方形～隅丸方形。柱穴配置は不明確。まれに中央または壁際で焼土の生成が認められる。③平面形は不明だが、柱穴状ピットが直線あるいはL字状に連なるもの。埋土は黒色土主体で、①・②を切る。

以上のほか、調査区北部の尾根頂部から縄文時代中期末葉住居跡、後期初頭住居跡、同方形柱穴列、同土器埋設遺構等が確認された。過年度調査で検出されている遺構群に伴うものである。



縄文時代早期の住居群



縄文時代後期初頭の住居跡

(4) つるかい
鶴飼遺跡

所 在 地：盛岡市玉山区洪民字鶴飼47-15ほか
委 託 者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事 業 名：一般国道4号洪民バイパス
発掘調査期間：平成23年9月5日～10月28日
調査終了面積：4,874m²
調査担当者：丸山浩治・村上 拓
主要な時代：縄文



遺跡の立地

IGRいわて銀河鉄道洪民駅の北東約2.6km、北上川東岸約500m、姫神山西麓の丘陵末端部に立地する。調査区内の微地形は、北側尾根部と南西向き斜面部で構成され、尾根部は幅5m弱とかなり狭い。斜面部には浅い谷筋が3条存在する。標高は203～215mで、調査前の状況は山林、畑地である。

調査の概要

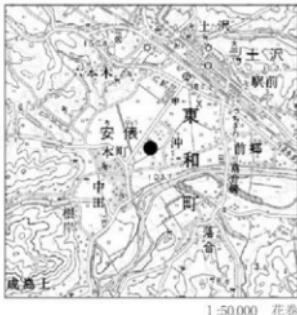
今回の調査では、縄文時代後期の竪穴住居跡4棟、住居状遺構1基、土坑28基（フラスコ形2、溝形11、円形15）、石器埋納遺構（アボ）1基、古代以降の炭窯1基が検出された。出土遺物は、縄文土器（後期中心）大コンテナ1箱、石器47点である。竪穴住居跡、フラスコ形土坑、石器埋納遺構はすべて狭い尾根上に構築されており、竪穴住居跡は並列する。溝形土坑はいわゆる陥し穴状遺構で、円形土坑の一部も同種の遺構と推定される。これらはいずれも斜面部谷筋に沿って構築されている。



遺跡全景（上が東）

(5) 中嶋遺跡

所 在 地：花巻市東和町安俵11区150-2 ほか
 委 託 者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名：東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
 発掘調査期間：平成23年10月17日～12月2日
 調査終了面積：2,811m²
 調査担当者：福島正和・巴 亜子
 主要な時代：平安



遺跡の立地

遺跡はJR釜石線土沢駅の南約1kmに位置する。遺跡の南に流れる猿ヶ石川によって形成されたと思われる自然堤防および後背湿地に立地し、標高は100m前後である。調査前は水田および雑種地等であり、ほぼ平坦であった。平成19、20年度同一事業により、平安時代の集落が調査されており、今回の調査区はその西側に隣接する。また、平成20年度に平安時代の集落が調査された羽黒田遺跡は南側に隣接している。

調査の概要

今回の調査では過年度調査された平安時代の集落が連続していることが判明した。集落を構成する検出遺構は竪穴住居跡9棟、土坑9基である。これら遺構が確認される場所は調査区の中で北側に位置する微高地部分であり、南側の湿地化している微低地部分では遺構がみられない。しかし、微低地部分では平安時代の遺物包含層が認められ、平安時代の土器を中心とした遺物が多く出土した。

今回の調査で出土した遺物は平安時代の土器が大コンテナ10箱、石器および石製品が中コンテナ2箱、不明木製品が3点である。遺物の大半が遺物包含層より出土したものである。土器は9～10世紀の土師器や須恵器が大半であるが、灰釉陶器が1点出土している。他の時代では、中世の陶磁器が2点、繩文土器および弥生土器が小コンテナ1箱出土している。

これまでの調査成果からもこの遺跡が、平安時代におけるこの地域の拠点的な集落であることが推察されていたが、今回の調査でもそれを補強するような遺物として灰釉陶器が出土した。また、微低地から出土する遺物量が多いことから9～10世紀にかけての大規模な居住域が微高地を中心として調査区外へもさらに広がっていたものとみられる。



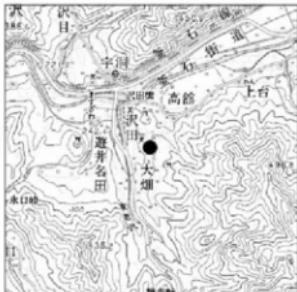
中嶋遺跡全景（南から）



土坑内遺物出土状況（南から）

(6) 大畠Ⅲ遺跡

所 在 地：遠野市宮守町下鱒沢33地割10地内にか
委 託 者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事 業 名：東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
発掘調査期間：平成23年4月20日～10月3日
調査終了面積：18,005m²
調査担当者：高木 晃・北田 熱・巴 亜子
主要な時代：縄文・近世



遺跡の立地

大畠Ⅲ遺跡は遠野市の西部、猿ヶ石川の支流家老沢に面した丘陵上に立地する。調査区は丘陵裾の緩斜面から丘陵頂部までを含み、標高は245～274mである。

調査の概要

調査区東側で竪穴住居跡17棟、土坑25基等からなる縄文時代中期後葉～末の集落跡が確認された。遺構は尾根頂部を中心に直径約70mの範囲に集中し、この外側では遺構、遺物分布が希薄になる。竪穴住居跡の平面形は円形を主体とし、炉の形態には土器埋設炉、石圓複式炉、地床炉等の種類がある。この他、尾根上から斜面にかけて局所的に並列する配置となる溝状の陥し穴状遺構22基、尾根上に19世紀代の土塹墓11基、西側の斜面に縄文後期中葉、同晚期後葉の竪穴住居跡各1棟、西側低地部に近世以降の水利施設の可能性がある竪穴状遺構1基、溝跡3条等が検出された。

出土遺物は縄文土器がコンテナ10箱（大木8b式～10式段階主体）、石器は剥片を含め260点余りだが、石皿・台石類の多さ（45点、17%）が特色である。この他、縄文時代早期、前期、弥生時代後期の土器片、近世末期～近代の陶磁器類が出土している。



縄文中期集落跡調査状況



重複する大小の竪穴住居跡



溝状陥し穴群

(7) 新田II遺跡

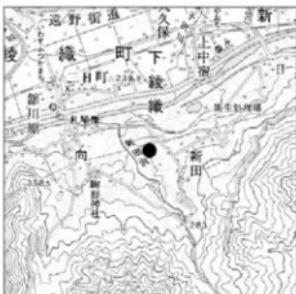
所 在 地：遠野市綾織町下綾織31地割147-1 地内ほか
 委 託 者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名：東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業

発掘調査期間：平成23年10月4日～12月7日

調査終了面積：921m²

調査担当者：北田 熱・高木 晃

主要な時代：縄文



遺跡の立地

新田II遺跡はJR釜石線岩手二日町駅から南東約1.2kmに位置し、猿ヶ石川左岸の河岸段丘上及び新田沢によって開削された谷底平野に立地している。現況は道路・水田で、標高は242～262m前後である。

調査の概要

検出した遺構は、縄文時代後期～晩期の遺物包含層（捨て場）1,650m²、縄文時代中期中葉の竪穴住居跡1棟、土坑1基、焼土遺構1基、沢跡4カ所、古代以降と考えられる溝跡8条である。

縄文時代の遺物包含層（捨て場）は、埋没した沢跡に形成されており、堆積土下位は水面下となる。出土遺物は縄文土器・石器・土製品・石製品と各種あり、トチ・クルミなど自然遺物も多量に出土している。次年度も継続調査の予定である。



西区遺物包含層



東区竪穴住居跡



晩期包含層遺物出土状況



後期包含層遺物出土状況

(8) 千苅遺跡

所 在 地：北上市二子字千苅地内

委 託 者：国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

事 業 名：北上川中流域河川改修事業

発掘調査期間：平成23年8月1日～12月19日

調査終了面積：4,274m²

調査担当者：北村忠昭・中村絵美・須原 拓・藤本玲子

主要な時代：縄文・古代以降



遺跡の立地

JR東北本線北上駅から北東約3km、北上川西岸沿いに位置する。本遺跡南側には大塙川を挟み小鳥崎館跡、北側には中村遺跡が存在し、南北に遺跡が連なっている。今年度調査区は遺跡範囲の南端、大塙川との合流地点付近である。調査前の現況は水田または畑地、南側の大塙川へ向かって緩やかに下る地形であったが、旧地形はこれらの川の氾濫・流路変更の影響を大きく受けしており、自然堤防状の高まりと、落ち込み部分を交互に繰り返し起伏を持っている。次年度以降、引き続き遺跡北側を調査する予定である。

調査の概要

検出した遺構は、住居跡5棟、焼土跡（炉跡？）3基、土坑31基、溝跡15条、焼成造構2基、柱穴状土坑約1300個である。住居跡は、縄文時代中期と晩期のもので、自然堤防状の高い場所と、落ち込みの底面またはこれが埋没する途中の低い場所から検出された。焼成造構（炭窯等か？）は、さらに埋没が進んだ状態で落ち込み斜面を利用し構築している。落ち込み埋没土中には縄文と古代の遺物が含まれており、溝跡はこれが埋まった段階（古代以降）でつくられている。柱穴状土坑は、溝跡と同一面、もしくは落ち込み底面で検出されており、後者は円形に巡る配置がみられるものや、周間に炉跡が検出されていることから、縄文時代の住居跡を構成する可能性がある。遺物は、土器・石器が各コンテナ8箱程度出土している。土器は大半が縄文時代（中期～晩期）のもので、土師器・須恵器・陶磁器も少量含まれる。住居跡内または、落ち込み埋没土からの出土が多い。今回の調査では、時代を追って自然地形が変わっていくなかでこれを利用し遺構を構築していく様子が確認された。



調査区全景



住居跡（落ち込み内）

(9) 大平野Ⅱ遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区若柳字大平野1-1ほか
 委 託 者：国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
 事 業 名：胆沢ダム建設事業（大平野地区）
 発掘調査期間：平成23年6月13日～11月7日
 調査終了面積：8,700m²
 調査担当者：須原 拓・佐藤あゆみ・濱田 宏
 主要な時代：縄文



遺跡の立地

奥州市役所胆沢総合支所の南西18kmに位置する。標高は355～360mを測り、胆沢川の支流、前川左岸の段丘上に立地する。今回の調査は通算で6回目を数え、調査範囲は昨年度調査区の南東側に位置する。

調査の概要

検出遺構は縄文時代中期・後期の竪穴住居跡7棟、住居状遺構1棟、中期～晩期の土坑135基、性格不明遺構1基のほか、時期不明の柱穴68個である。出土遺物は縄文時代早期～晩期の土器・石器、大コンテナ255箱分である。土器は主に早・前期は遺構外、中期（大木9式主体）は竪穴住居跡の埋土、後晩期は土坑の埋土から出土しており、調査区の場所により出土する土器の時期にも偏りが認められる。石器は剥片石器では石鏃や石匙、スクレイバーが多く、礫石器では敲石、凹石が多い。石器も主に遺構内から出土している。



調査区全景（南東から）



縄文時代中期の集落（西から）



縄文時代中期の竪穴住居（南西から）



縄文時代出土状況（南東から）

(10) 二又遺跡

所 在 地：盛岡市下飯岡 1 地割55-1 ほか

委 託 者：盛岡広域振興局土木部

事 業 名：主要地方道盛岡和賀線道路改良工事

発掘調査期間：平成23年5月6日～8月31日、9月16日～10月14日

調査終了面積：3,460m²

調査担当者：川又 晋・金子昭彦・巴 亜子

主要な時代：平安



遺跡の立地

二又遺跡は、盛岡市役所の南西方向約4.5kmに位置し、零石川南岸の沖積地上に立地する。標高は127m前後であり、調査前は宅地及び畑であった。過年度に盛岡市教育委員会による調査が行われ、今回は第11次調査となる。来年度も隣接地を調査予定である。北西方向約1.5kmには、国指定史跡の志波城跡がある。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構3基、平安時代の竪穴住居跡12棟・掘立柱建物跡1棟・竪穴建物跡1棟・土坑6基、近世以降もしくは時期不明の円形周溝1条、溝跡1条、柱穴239個である。

出土遺物は、縄文土器小コンテナ0.5箱、石鐵1点、

土師器、須恵器大コンテナ6箱、鉄製品3点、礫石器11点、近世以降の銭貨43点などである。

調査区は、遺跡の中央部を南北に貫く細長い範囲で、北側と南側は旧河道となる。竪穴住居跡は調査区全域に分布し、北側での密度が高い。2棟は焼失住居とみられ、床面上に炭化材が多く出土している。掘立柱建物は径1m前後の大型柱穴で構成され、規模は3間×2間である。集落の中心的建物と推測される。



調査区全景（西から）



掘立柱建物跡（東から）



炭化材出土状況（西から）

ふどうたて
(11) 不動館跡

所 在 地：二戸市浄法寺町清水尻11-2ほか
 委 託 者：県北広域振興局土木部二戸土木センター
 事 業 名：主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業
 発掘調査期間：平成23年6月16日～12月8日
 調査終了面積： $4,645\text{m}^2$
 調査担当者：小山内 透・福島正和・小林弘卓・菅野 桥
 主要な時代：中世



遺跡の立地

不動館跡は、二戸市浄法寺町に所在し、二戸市役所浄法寺総合支所の東方約1kmに位置し、安比川右岸の北側に張り出した海拔198～230mの台地の縁辺部に立地する。遺跡の立地する台地の現況は主に山林で、一部は畠地として利用されている。

今年度当初の調査対象面積は $5,910\text{m}^2$ であったが、 $1,265\text{m}^2$ が未了となり、来年度調査予定の約 $3,000\text{m}^2$ と合わせて調査を継続することとなった。

調査の概要

今回の調査区は主郭を中心とする遺跡主体部が対象となった。検出された遺構は、普請地形の跡として平坦地（曲輪2・帯曲輪3・腰曲輪2）7箇所、塁壁（土壘1・切岸3）4箇所、空堀4条、大走り状通路2箇所などと、作事的遺構として張り出し部をもつ堅穴建物跡4棟、地床炉をもつ堅穴住居状遺構（工房跡？）6棟、堅穴状遺構7棟、土坑類21基、焼土遺構3基、柱穴状土坑約50個などがあり、ほとんどが主郭の曲輪で確認された。このうち帯曲輪2箇所と空堀1条が未了範囲にあたる。

出土した遺物は、遺跡の主体時期である中世に所属するものとしては、陶磁器類（青磁、常滑など）6点、石器類（石臼、砥石など）3点、鉄製品（鉄鎌、小刀、鋸鍤車、釘、仏具、棒・板状など）約80点、古銭8点と、鍛冶・鋳造関連遺物（羽口、炉壁片、鋳型片、鉄滓、鉄床石など各々数点）なども堅穴状遺構から廃棄状態で出土している。このほか近代に客土されたと思われる山砂から縄文土器が大コンテナ1箱と礫石器類が中コンテナ16箱分出土した。

調査区外も含め、本遺跡は並列的な曲輪3箇所をそれぞれ空堀で囲むことで、台地縁辺の主郭が実際的には二重の堀切で防御される構造の縄張りであることが判明した。



調査前空撮全景



空堀跡東側完掘

(12) 彼岸田遺跡

所 在 地：奥州市前沢区白山字彼岸田地内
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室
事 業 名：経営体育成基盤整備事業白山地区
発掘調査期間：平成23年6月6日～8月31日、10月11日～11月4日
調査終了面積：3,742m²
調査担当者：西澤正晴・高橋麻依子
主要な時代：縄文・古代・12世紀



遺跡の立地

彼岸田遺跡はJR東北本線前沢駅より北東約2kmに位置し、胆沢扇状地の水沢段丘高位面に立地する。遺跡の標高は26m前後であり、周囲の水田よりも一段高い。調査区の現況は水田・畑地等である。

調査の概要

彼岸田遺跡の最初の調査となる。遺跡は、およそ南北に細長い台地上にあり、調査区はその東西の縁辺部と中央をトレーニング状に設定した形になる。調査地を含めて、遺跡は大きく地形改変が行われており、検出された遺構の残りは悪いといえる。調査の結果、検出された遺構は、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡12棟以上、土坑15基、溝跡14条、井戸跡1基、不明遺構2基である。各時代の遺構が複層していることが判明したが、主体は平安時代（12世紀を含む）の集落となろう。竪穴建物跡は1棟のみであるが、調査区外の比較的標高が高い地点に広がっている可能性がある。そのほか、各時期の掘立柱建物跡が集中しているが、時期の特定は今のところできていない。

出土遺物は、総量で大コンテナ7箱である。縄文土器～弥生土器、平安時代の土師器・須恵器が主体であるが、そのほか12世紀代の常滑・渥美窯陶器や各種かわらけ、中国産白磁なども出土している。また、近世の陶磁器も少数ながら出土している。したがって、検出された建物跡には、これらの時期のものが含まれている可能性がある。

上記のように、今回の調査で得られる資料は少ないながらも、遺跡内容の一端が判明したことは重要であり、また、12世紀の遺物が得られたことは平泉文化の広がりを考える上では重要な成果である。



竪穴建物のカマド



井戸跡

(13) 田高 II 遺跡

所 在 地：奥州市前沢区白山字鍵取59ほか
 委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室
 事 業 名：経営体育成基盤整備事業白山地区
 発掘調査期間：平成23年4月25日～7月28日
 調査終了面積：2,000m²（本調査1,500m²、確認調査500m²）
 調査担当者：北村忠昭・中村絵美・杉沢昭太郎
 主要な時代：縄文・古代・中世・近世



遺跡の立地

遺跡は奥州市前沢総合支所の北東約2.5kmに位置し、北上川右岸の水沢段丘高位面上に立地する。現況は水田・畑地、標高は31～32m前後である。今回の調査区は昨年度未了となつた2,000m²を対象とした。昨年度の調査区は北側で接しており、平成8年の調査区とは西側で接している。また、平成14年に行われた第2次調査は遺跡の南東端にあたり、今回の調査区とは50～150m離れている。

調査の概要

今回の調査では縄文時代の竪穴住居跡7棟、フラスコ状土坑11基、陥し穴状遺構3基、土坑1基、遺物包含層620m³、平安時代の焼土遺構1基、12世紀の溝跡1条、中世～近世の溝跡25条、土坑4基、柱穴状土坑（掘立柱建物跡19棟分を構成するものも含む）597個、時期不明の溝跡13条、土坑17基、焼土遺構1基、不明遺構5基が検出された。

出土遺物は縄文土器（前期後葉が中心）大コンテナ10箱、土師器、須恵器、かわらけ、中世陶器、近世陶器器合わせて小コンテナ1箱、石器大コンテナ9箱、釘等の金属製品14点である。

昨年度に続き、縄文時代から中世までの遺構・遺物が確認できた。成果としては、①今回の調査区の南東側に当たる、明後沢川に面した段丘縁に縄文時代前期後葉の竪穴住居跡やフラスコ状土坑がまとまって確認されたこと、②12世紀の遺構・遺物が確認されたこと、③方形区画の大溝の外側にも掘立柱建物跡を中心とした中世期の遺構が広範囲に広がっていること、の3点が挙げられる。2箇年の調査によって遺跡東側には、主に縄文時代前期後葉の遺構が、北側から中央部の広範囲には中世期の遺構が広がっていることが判明した。



縄文時代前期の遺構群



中世～近世の掘立柱建物跡

(14) 安久沢東遺跡

所 在 地：奥州市前沢区古城字姥屋敷地内
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室
事 業 名：経営体育成基盤整備事業白山地区
発掘調査期間：平成23年4月25日～6月3日
調査終了面積：1260m²
調査担当者：西澤正晴・高橋麻依子
主要な時代：古代～中世



遺跡の立地

安久沢東遺跡はJR東北本線前沢駅より北北東約3kmに位置し、胆沢扇状地の水沢段丘高位面に立地する。遺跡の標高は30m前後で、周囲の水田である低地よりも一段高い。調査区の現況は水田・畑地等である。

調査の概要

本遺跡はこれまで2回の調査が行われており、今年度が3回目となる。今年度の調査区は、昨年度の隣接地点の調査であり、昨年度と同様に標高が相対的に高い地点は削平が大きく及んでおり、地山下層の礫層が露出しており、遺構は検出されなかった。これに対し、標高が低い縁辺部は削平が少なく、各種の遺構が残存している。検出された遺構には、掘立柱建物跡5棟、土坑2基、井戸跡1基、溝跡4条、柱穴161個（建物分も含む）がある。掘立柱建物跡のうち1棟からは12世紀の手づくねかわらけが出土する。したがって、少なくとも1棟の建物跡はこの時期に所属する可能性が高く、隣接する他の建物跡も同様の時期が想定される。そのほかの遺構については遺物がほとんど出土せず時期不明のものが多い。

先に触れたように今回の調査では遺物の出土が少なく小コンテナ1箱分のみである。しかし、稀少な12世紀の手づくねかわらけがあり、昨年度分も含めて比較的まとまってこの時期の遺物が出土している。

このように本遺跡は、昨年度分の調査もあわせ、古代から近世にかけての遺跡であることが判明し、とくに12世紀の遺構や遺物を発見したことは重要な成果といえる。



掘立柱建物跡



井戸跡

(15) 錢倉遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字錢倉24-2 ほか
 委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室
 事 業 名：経営体育成基盤事業南下幅北部地区
 発掘調査期間：平成23年4月26日～5月31日
 調査終了面積：1,167m²（本調査747m²、確認調査420m²）
 調査担当者：溜 浩二郎・米田 寛
 主要な時代：近世



遺跡の立地

錢倉遺跡はJR東北本線水沢駅から北西約5.0kmに位置する。胆沢肩状地内の水沢段丘低位面に立地し、標高は78～80mで、調査前の状況は農道・水田・畑地等である。

調査区を含む周辺一帯は過去の圃場整備事業により、大規模な造成が行われており、本来遺構が確認される層の大半が削平によりなくなっている状況であった。

調査の概要

調査区は3箇所に分かれる。検出遺構は溝跡3条、土坑2基、柱穴列4基、柱穴状土坑23個である。主に東側の調査区から集中して遺構が見つかった。出土遺物は、柱穴状土坑から近世陶磁器2点出土しているが、それ以外は出土していない。



錢倉遺跡（直上から、上が北、白枠内が調査区）

(16) 石田 I・II 遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字石田地内
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室
事 業 名：経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区
発掘調査期間：平成23年6月14日～12月2日
調査終了面積：3,404m²（本調査2,474m²、確認調査930m²）
調査担当者：米田 寛・瀬 浩二郎・濱田 宏・西澤正晴・川又 道
主要な時代：古墳～平安



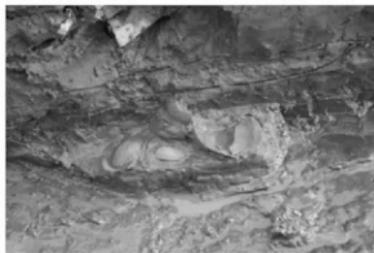
遺跡の立地

奥州市立南都田小学校の東約1.5km、国指定史跡の角塚古墳からは東約1.2kmに位置する。調査区の現況は、水田と農道であった。今回の調査区は、遺跡範囲の中央から北西にかけて設定された。本遺跡は標高65～70mを測り、胆沢扇状地の水沢段丘低位面上に立地する。

調査の概要

検出造構は竪穴住居跡51棟、住居状造構3棟、土坑11基、溝跡13条、柱穴列3条、柱穴状土坑143個である。竪穴住居跡の大半が古墳時代である。

出土遺物は土師器・須恵器が大コンテナ31箱、黒曜石製搔器などの剥片石器が小コンテナ1箱、磨石、鉄床石などの礫石器が中コンテナ8箱、石製品とミニチュア、輪羽口などの土製品が小コンテナ1箱、鐵滓が中コンテナ1箱、鐵製品5点、コハク塊1点である。



住居から出土した古墳時代中期の土器



火災住居遺物出土状況



古墳時代後期の鍛冶炉



祭祀の行われたカマド

(17) ようがい
要害遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字本木地内
 委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室
 事 業 名：経営体育成基盤事業南下幅北部地区
 発掘調査期間：平成23年5月12日～6月22日
 調査終了面積：1,500m²（本調査933m²、確認調査567m²）
 調査担当者：瀬 浩二郎・米田 寛
 主要な時代：平安



遺跡の立地

要害遺跡は奥州市役所から西約4.2kmに位置する。胆沢扇状地内の水沢段丘低位面に立地し、標高は78～80mで、調査前の状況は農道・水田である。

調査区を含む周辺一帯は過去の圃場整備事業の影響で地形が改変され、本来遺構が検出される黒褐色土層の大半が削平され、このため遺構の残存状況が悪い状況であった。

調査の概要

検出された遺構は竪穴住居跡4棟、住居状遺構4基、土坑11基、溝跡1条、柱穴状土坑18基、性格不明遺構1基ですべて平安時代のものである。竪穴住居跡としたものはいずれもカマド（痕跡も含む）が確認されたものであり、住居状遺構としたものは竪穴住居を構築する際の掘り方である可能性があり、いずれも溝状の痕跡が方形状に巡っている。また、痕跡の埋土からは土器片が出土する。出土遺物は、主に土師器・須恵器で大コンテナで3箱分出土している。

今回の調査で平安時代の集落跡であることが明らかになったが、過去に胆沢町教育委員会が行った発掘調査では、遺跡の東側で奈良時代の竪穴住居跡が見つかっており、奈良時代の集落は今回調査した場所より東側に展開していたと考えられる。



竪穴住居跡



溝跡



調査区東側

(18) 沢田遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字沢田地内
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室
事 業 名：経営体育成基盤事業南下幅北部地区
発掘調査期間：平成23年10月5日～12月2日
調査終了面積：812m²（本調査489m²、確認調査323m²）
調査担当者：溜 浩二郎・濱田 宏・西澤正晴・米田 寛
主要な時代：古墳～平安



遺跡の立地

沢田遺跡はJR東北本線水沢駅から北西約4.0kmに位置する。胆沢肩状地内の水沢段丘低位面に立地し、標高は70～72mで、調査前の状況は農道・水田である。

調査区を含む周辺一帯は過去の造成工事の影響で、平安時代以降の堆積層が少なからず削平されており、特に西側調査区の遺構の残存状況が悪い。

調査の概要

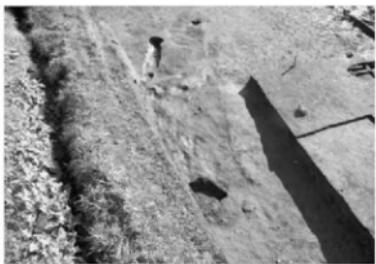
調査区は東西の2箇所に分かれる。検出した遺構は西側が平安時代の竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡1棟、柱穴状土坑15個、土坑6基、溝跡1条で他に集落と隣接する旧沢跡から遺物が大量に出土している。東側からは平安時代の竪穴住居跡1棟、古墳時代末期～奈良時代の円形周溝墓4基、土壙墓10基で他に溝1条、土坑8基が検出された。

出土遺物は、主に土師器・須恵器で大コンテナで12箱分、白磁片2点、黒曜石剥片が111点、鉄鏃1点、鉄斧1点、ガラス玉10点、琥珀玉3点、他に獸骨片が少量出土した。

今回の調査で調査区の西側は平安時代の集落跡、東側は古墳時代末期～奈良時代は墓域として利用され、平安時代には集落が営まれていたことが明らかになった。なお、調査区東側については次年度も継続して調査を行う予定である。



土壙墓



竪穴住居跡



調査区東側全景（上が西）

(19) つつみ 堤遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字四ッ柱201番地ほか
 委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室
 事 業 名：経営体育成基盤整備事業都鳥2期地区
 発掘調査期間：平成23年4月25日～6月13日
 調査終了面積：1,671m²（本調査1,410m²、確認調査261m²）
 調査担当者：須原 拓・佐藤あゆみ
 主要な時代：奈良～平安・近世



遺跡の立地

奥州市立南都田小学校の南東約500mに位置する。調査前の遺跡登録範囲の現況は、水田、畑地であり、今回の調査区は遺跡登録範囲の中央寄りから西端部分にかけての水田範囲に設定された。遺跡は標高70～80mを測り、胆沢扇状地の水沢段丘高位面上に立地する。

調査の概要

検出遺構は古代の竪穴住居跡5棟、住居状遺構1棟、土坑50基、近世の掘立柱建物跡3棟、井戸状の大型土坑1基のほか、時期不明の溝8条、柱穴状土坑405個である。出土遺物は古代が土師器・須恵器大コンテナ2.5箱、灰釉陶器片1点で、概ね竪穴住居や土坑の埋土中から出土している。近世では陶器数点、砥石・火打ち石7点、鉄製品2点、無文の銭貨1点で、遺構外出土が多い。



調査区全景（南から）



遺構検出状況（東から）



土坑から出土した土師器（北西から）



出土した土師器（奈良時代）

(20) 作屋敷遺跡

所 在 地：奥州市胆沢区南都田字独光287番地ほか
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室
事 業 名：経営体育成基整備事業都鳥3期地区
発掘調査期間：平成23年4月26日～9月2日
調査終了面積： $5,190\text{m}^2$ （本調査 $2,453\text{m}^2$ 、確認調査 $2,737\text{m}^2$ ）
調査担当者：濱田 宏・小林弘卓・巴 亜子
主要な時代：奈良・平安



遺跡の立地

作屋敷遺跡は奥州市胆沢区南都田独光・作屋敷地区に跨っており、JR東北本線水沢駅の西方約6km、胆沢総合支所の北東2kmほどに位置する。遺跡は、胆沢扇状地内の河岸段丘（水沢段丘高位面）上に立地し、標高は88～94mを測る。調査区の現況は、昭和30年代に開かれた水田である。

調査の概要

本遺跡は、これまで3回の発掘調査が行われているが、当センターが平成20年度に実施した前回調査では、平安時代9世紀後半から10世紀にかけての集落跡が確認された。今回の調査では、奈良時代後半の堅穴住居跡や平安時代前期の掘立柱建物跡群、工房と思われる遺構などが見つかっており、遺跡の広がりや各遺構の構成時期、その性格が一層明らかとなった。

検出された遺構は、縄文時代の階下穴状遺構3基、奈良・平安時代の堅穴住居跡11棟、上述した工房の可能性がある平安時代の住居状遺構3棟、平安時代に属する掘立柱建物跡7棟以上、墓壙1基、各時代の溝跡42条、土坑44基、生産関連の土坑2基、焼土遺構2基、柱穴状土坑270個あまりと多種多様である。平安時代の掘立柱建物跡と堅穴住居、生産関連遺構の方については検討を要する。

出土遺物は、遺構の時期と同じ奈良・平安時代の土師器・須恵器を主体とし、刀子・釘などの鉄製品や石製鋸鍤車、フイゴの羽口・炉壁などの土製品が見られる。この他には、縄文時代の石器や溝跡から出土した平安時代後期12世紀の国産陶器（常滑・渥美・須恵器系陶器）や黒曜石の剥片・柱穴の埋土に含まれていた14～15世紀の青磁碗や瓶類なども認められる。

今回得られた成果からも、本遺跡が古代の拠点的な集落であったことは明らかであり、今後は周辺の遺跡の調査成果も考慮しつつ、当時の様相を考えていくたい。



重複する据立柱建物群



奈良から平安時代の堅穴住居跡

(21) 中畠城跡

所 在 地：奥州市前沢区古城字水上西88番地他
 委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室
 事 業 名：経営体育成基盤整備事業古城2期地区
 発掘調査期間：平成23年4月25日～7月6日
 調査終了面積：950m²
 調査担当者：杉沢昭太郎・巴 亜子
 主要な時代：中世



遺跡の立地

中畠城跡はJR東北本線前沢駅の北北東約3.5kmに位置している。水沢段丘高位面にある小規模な微高地を複数の堀で囲んで城域としている。調査区の現況は標高32～34mの水田であった。

調査の概要

中畠城は安永風土記によると桙山館（御城主桙山平次郎）と記載される城館である。調査区は主に城館を取り囲む北側の外堀と内堀の一部にあたる。検出された遺構には中世の堀跡5条、古代の溝跡2条、土坑2基、旧河道1箇所、旧石器集中区1箇所である。複数ある堀跡はそれぞれが間仕切りを有する「障子堀」であることが判明した。出土遺物から16世紀に構築されたと言え、県内では金ヶ崎町にある柏山館跡に次ぐ2例目で極めて珍しい事例である。

遺物では中世の陶磁器が小コンテナ1箱、木製品が大コンテナ1箱、旧石器3点他が出土している。



中畠城外堀跡（西から）

(22) 八反町遺跡

所 在 地：奥州市前沢区小古城字新山前150番地地先ほか

委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室

事 業 名：経営体育成基盤整備事業古城2期地区

発掘調査期間：平成23年4月25日～12月2日

調査終了面積：499m²

調査担当者：星 雅之

主要な時代：古代・近世



遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線陸中折居駅から南東約1.7kmにあり、胆沢扇状地内の水沢段丘高位面に立地する。標高は32～33mで、調査前の現況は畑地である。今回の調査区は、明後沢川のすぐ北側で、昨年度当センターにより調査が実施された調査地点からみると北へ約500mの距離にある。今年度調査が実施された古城林遺跡調査区とは北側で接する。

調査の概要

検出された遺構は、古代の溝跡1条、中近世の竪穴状遺構2基、土坑1基、柱穴状土坑4基、近世若しくはそれ以降の溝跡1条である。遺物は古代の土器小コントナ0.5箱分、近世～現代の陶磁器小コントナ0.5箱分出土した。平成22年度の調査では、主に12世紀の遺構・遺物が纏まりを持って検出され注目されたが、今回の調査では見つかっていない。



八反町遺跡と古城林遺跡（直上から、上が北）

こじょうはやし
(23) 古城林遺跡

所 在 地：奥州市前沢区古城字林後126番地地先はか

委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室

事 業 名：経営体育成基盤整備事業古城2期地区

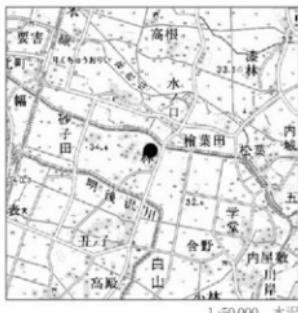
発掘調査期間：平成23年4月25日～12月2日

調査終了面積：14,558m²

調査担当者：星 雅之・丸山直美・杉沢昭太郎・丸山浩治・

高橋麻依子・藤本玲子・佐藤あゆみ

主要な時代：縄文・古代・中近世



遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線陸中折居駅から南東約1.3kmにあり、胆沢扇状地内の水沢段丘高位面に立地する。標高は32~34mで、調査前の現況は水田、畠地、牧草地、農道である。今回の調査区は、今年度の八反町遺跡調査区と南側で接する。

調査の概要

検出された遺構は、大別すると縄文時代、古代（古代と推定されるが中世までの時期幅でしか捉えられないものも含む）、中近世（基本的に中世と推定されるが特定できず時期幅を広げて捉える）、近世、時期不明に分かれる。縄文時代は陥り穴状遺構36基、土坑6基、古代は竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡16棟、井戸跡7基、土坑54基、土取り穴3基、溝跡60条、カマド状遺構1基、円形周溝2基、不明遺構10基、柱穴状土坑1344個、中近世は掘立柱建物跡15棟、竪穴建物跡3棟、土坑6基、堀跡2条、溝跡3条、柱穴状土坑512個、近世は柱穴列1条、溝跡5条、畝間状遺構2か所、時期不明の土坑24基、溝跡7条である。

遺物は縄文土器3点、古代の土器中コンテナ10箱、中世～現代の陶磁器小コンテナ0.5箱、石器中コンテナ2箱、土製品2点、鉄製品7点、獸骨1点（馬か）である。



円形周溝（北から）



掘立柱建物跡（西から）

(24) 小野遺跡

所 在 地：一関市花泉町日形字小野46-1ほか
委 託 者：県南広域振興局農政部一関農村整備センター
事 業 名：経営体育成基盤整備事業日形地区
発掘調査期間：平成23年4月18日～6月10日
調査終了面積：1,880m²（本調査896m²、確認調査984m²）
調査担当者：小山内 透・小林弘卓・菅野 梓
主要な時代：古代



遺跡の立地

小野遺跡は、JR東北本線花泉駅の東方向約6kmに位置し、北上川と大江川の合流する付近の右岸に形成された自然堤防上に立地する。現況は水田と畠地であったが、調査区以外については、ほ場整備が進んでいたため、旧地形は判然としなかった。標高は13m前後である。

調査の概要

今回の調査はA・B区の2箇所について行ったが、工事工法の違いにより、掘削されるB区とA区道路予定地の南北道は本調査、東西道は遺構確認調査となった。A区確認調査区は農作業道であったため、比較的の遺存状況は良好であったが、A・B区本調査区は田区で一段低く、以前の開墾によりかなり削平されており、結果的に遺構密度は希薄な状態となっていた。

検出された遺構は、A区本調査区では、古代の竪穴住居跡1棟と竪穴住居状遺構1棟、確認調査区で竪穴状遺構1棟の計3棟で、炭化物や焼土が全体的に確認されたことから焼失住居の可能性が高い。このほか本調査区でプランは確認できなかったが、焼土・柱穴・壁溝と思われる溝跡の配置から竪穴住居跡1棟と判断された。それと本調査区で時期不明の土坑4基、B区では時期不明の4個の柱穴状土坑からなる柱穴列が1列確認された。配置規模の状況から南北二面に庇のある掘立柱建物跡の可能性も考えられる。

出土遺物は、土師器（壺・壺）と須恵器（壺・壺・蓋）で、竪穴住居等を中心に中コンテナ2箱、竪穴住居状遺構からは砥石2点と碗形鍛冶滓1点も出土し、遺構外からは土錐1点と近世～近代の陶磁器類が数点出土した。



竪穴住居跡完掘



炭化物等出土状況

なかがみよっかいち
(25) 中神四日市遺跡

所 在 地：一関市花泉町日形字中神293ほか
 委 託 者：県南広域振興局農政部一関農村整備センター
 事 業 名：経営体育成基盤整備事業日形地区
 発掘調査期間：平成23年4月18日～4月28日
 調査終了面積：140m²
 調査担当者：小林弘卓
 主要な時代：古代



遺跡の立地

中神四日市遺跡は、一関市役所花泉支所の北東方向約6.5kmに位置し、北上川右岸に形成された自然堤防上に立地する。調査区の現況は休耕田で、標高は16～17mである。

調査の概要

今回の調査で確認した遺構は、土坑1基と柱穴状土坑4個である。遺構の検出面はいずれも北上川に起因する砂層である。遺構内から出土した遺物がないため時期を特定することはできないが、遺構外から土師器片数点と陶磁器数点が出土している。地形状況や遺構密度等から、今回の調査区は遺跡範囲の南限にあたると思われる。



遺跡全景

(26) 小野Ⅱ遺跡

所 在 地：一関市花泉町日形字共和37-1ほか
委 託 者：県南広域振興局農政部一関農村整備センター
事 業 名：経営体育成基盤整備事業日形地区
発掘調査期間：平成23年4月18日～5月19日
調査終了面積：104m²
調査担当者：菅野 梢
主要な時代：古代



遺跡の立地

小野Ⅱ遺跡は、JR東北本線花泉駅の東方向約6kmに位置し、北上川と大江川の合流付近右岸の小野遺跡が位置する自然堤防の後背湿地に立地する。現況は水田、標高は12m前後である。

調査の概要

検出された遺構は、水田跡が十和田a火山灰降下の前後で二面確認された。県教育委員会の事前試掘により、火山灰が堆積する一辺約2.5mの略方形の区画が検出されていたものだが、今回の調査では、平面的には明瞭な区画や農作業の足跡等は確認できず、断面観察で一部畦畔状の高まりを認めたに止まる。水田跡とした判断はプラントオパールの分析結果によるものである。

出土遺物は、土師器（甕・壺）と須恵器（甕）が水田跡耕作土中から十数点と鉄滓1点が出土した。



水田跡断面



水田跡(十和田a火山灰降下前)



水田跡(十和田a火山灰降下後)

(27) 飯岡才川遺跡 第18、19次調査

所 在 地：盛岡市飯岡新田2地割46-1ほか
 委 託 者：盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名：盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間：平成23年8月1日～11月16日
 調査終了面積：9,299m²
 調査担当者：金子昭彦・藤本玲子
 主要な時代：縄文・古代・近世



遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅の南西約1.2kmに位置し、季石川が形成した低位段丘上に立地する。調査区は遺跡の北東端にあたり、標高は123m前後、現況は畑地、宅地である。今回で遺跡のはば全域を調査したことになり、遺跡の全容把握が期待される。

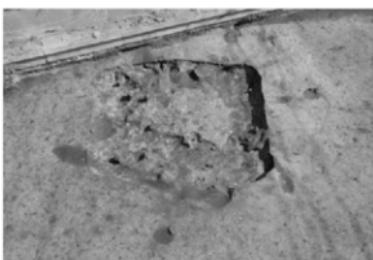
調査の概要

検出遺構は、縄文時代と思われる陥し穴状遺構14基、平安時代（10世紀初頭前後）の竪穴住居跡4棟、住居状遺構4基、掘立柱建物跡1棟、土坑8基、溝跡3条、近世末の掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基、時期不明の掘立柱建物跡1棟、焼土2基、出土遺物は、土師器・須恵器中コンテナ4箱、焼粘土塊2点、砥石類16点、石製勾玉1点、鉄製品12点、鉄滓1点、古銭（寛永通宝）3点である。

溝状の陥し穴状遺構は、いずれも段丘崖に近い場所に検出され、幾つかのまとまりを持つ。幅が狭いのが特徴で、拳も入らないものがあった。

竪穴住居跡、住居状遺構は、調査区内に点在し、最も東側に検出された1棟は、カマドが5つ確認され、南側の隣接調査区で検出された住居跡と同様の特徴を持つ。

平安時代の掘立柱建物跡は、写真に示した溝跡より古く、2×2間の規模で東辺に扉が付き、埋土からは灰白色火山灰が検出された。



カマドを5つ持つ竪穴住居跡



平安時代の掘立柱建物跡



溝跡

(28) 佐原 II 遺跡

所 在 地：宮古市佐原三丁目20番1ほか

委 託 者：宮古市

事 業 名：北部環状線道路改良事業

発掘調査期間：平成23年11月1日～11月18日

調査終了面積：330m²

調査担当者：杉沢昭太郎・佐藤あゆみ

主要な時代：弥生



1:50,000 宮古

遺跡の立地

佐原 II 遺跡は JR 山田線宮古駅の北北東約 2 km に位置している。小規模な二つの尾根に挟まれた傾斜地と平坦面からなり、調査前の現況は杉林と雜種地であった。遺跡の標高は 100～110m を測る。

調査の概要

調査区は西から東へと延びる痩せ尾根およびその下を流れる沢部からなり、尾根の先端を下った部分から弥生時代初頭とみられる竪穴住居跡が 2 棟、重複して検出された。新しいほうの住居跡は地床炉、古い段階の住居跡は石囲炉であった。今年度の調査ではこの他に遺構は見られなかつたが、縄文時代早期と前期の土器片が数片出土している。

出土遺物は縄文土器が小コンテナ 0.1 箱、弥生土器が中コンテナ 1 箱、石器類が小コンテナ 0.5 箱、近世以降の陶磁器が 3 点である。

これまでの調査により遺跡西側にある尾根からの緩斜面部には弥生時代初頭頃の小規模な集落が広がっていることが分かった。縄文時代早期・前期の遺物も出土しているが、その数はごく微量で調査区内からは遺構は見つかなかつた。



重複する弥生時代の住居

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうさんねんどはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成23年度発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団文化財調査報告書							
シリーズ番号	第603集							
編著者名								
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦 2012年3月19日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
いわてけんもりおかじ 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 字笠平1-77-1ほか	市町村 03201	遺跡番号 KE77-1005	39度 48分 09秒	141度 09分 54秒	2011.04.18 ～ 2011.05.31	1,470m ²	四十四田ダム堰堤改良事業	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
笠平遺跡及び 奥州道中	狩獵場	縄文時代	土坑3基 陥入穴状遺構5基		縄文土器、礫石器		道路跡の路盤から寛永通貫が2点出土したが、路盤の構築・使用時期とは一致しない。	
	集落	古代	住居状遺構1基 陥入穴状遺構1基		土師器			
	街道	近代以降	道路跡1条		錢貨			
要約	今回の調査で、当該域は縄文時代および古代に狩獵場として用いられていたことが判明した。加えて、住居状遺構の存在と土師器甕片の出土から、古代には居住域としても利用されていたと考えられる。東区には、調査範囲を収容するように奥州道中が存在する。ただし、少なくとも当該域は近代以降の拡幅を受けておりそれ以前の構築痕跡を留めておらず、残存路盤は昭和まで使用されていたことが判明した。拡幅時期がいつなのか、それを推定する具体的な物的資料はないが、1876(明治9)年と1881(同14)年の明治天皇東北巡幸に伴い馬車通行のため各所で道路幅を2間(3.6m)にする拡幅が行われたとされ、当該域もその工事がなされた可能性がある。							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
いわてけんもりおかじ わかいかほの 岩手県盛岡市向中野 字野原42-10	市町村 03201	遺跡番号 LE26-0139	39度 57分 59秒	141度 13分 43秒	2011.07.01 ～ 2011.07.29	2,797m ²	盛岡新都市土地区画整理事業	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
矢盛遺跡 第29次調査	集落	近世	掘立柱建物跡2棟		陶磁器			
要約	矢盛遺跡は、縄文時代の狩獵採集の場、平安時代の集落、中世の居館・集落、近世の集落跡である。今回の調査区は遺跡の北端部にあたる。検出された近世民家2棟(掘立柱建物跡)は何れも曲がり屋の形態をしており、曲がり屋の系譜を考える上で興味深い事例といえる。							

幸緯度・経度は世界測地系による数値である。なお、この座標値は2011年5月31日に国土交通省国土地理院が発表した改正成果を用いて算出したものである。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第603集

平成23年度発掘調査報告書

印 刷 平成24年3月15日
発 行 平成24年3月19日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下巣岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

発 行 (公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235
FAX (019) 625-3595

印 刷 有限会社セーコー印刷
〒020-0877 岩手県盛岡市下の橋町2-23
電話 (019) 651-3606